

# Global Classrooms

グローバル・クラスルーム

報告書

高校模擬国連国際大会への第8回日本代表団派遣支援事業



2014年8月



グローバル・クラスルーム日本委員会  
Japan Committee for Global Classrooms

## 【後援】

外務省

経済産業省

文部科学省

公益財団法人日本国際連合協会

国際連合広報センター

## 【協賛】

株式会社公文教育研究会



三菱商事株式会社



トヨタ自動車株式会社



株式会社ニチレイ



三井物産株式会社



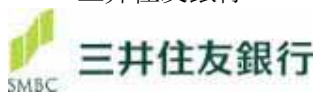
みずほ銀行



学校法人河合塾



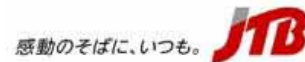
三井住友銀行



TOEFL Junior (GC&amp;T)



株式会社 JTB



一般財団法人凸版印刷三幸会



株式会社講談社



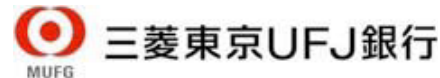
株式会社ナガセ 東進ハイスクール



学校法人 駿河台学園



三菱東京 UFJ 銀行



株式会社エヌエフ回路設計ブロック

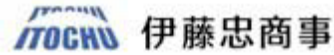


## Global Classrooms

キックマン株式会社



伊藤忠商事株式会社



学校法人高宮学園代々木ゼミナール



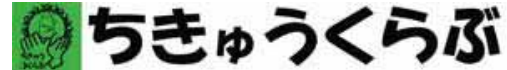
丸紅株式会社



日本光電工業株式会社



損保ジャパンちきゅうくらぶ



株式会社日能研

海外トップ大進学塾 Route H  
(ベネッセコーポレーション)

## 【協力】

日本航空株式会社



読売新聞



日本経済新聞社

株式会社リクルート



理想科学工業株式会社



(ご支援順)

## 目次

目次.....	- 1 -
はじめに.....	- 2 -
グローバル・クラスルーム.....	- 2 -
企画概要.....	- 3 -
派遣報告.....	- 4 -
受賞.....	- 9 -
参加者報告(アドバイザー).....	- 10 -
参加者報告(派遣生).....	- 15 -
支援協力団体一覧.....	- 35 -
ACCUからのメッセージ.....	- 37 -
グローバル・クラスルーム日本委員会(2014年6月現在).....	- 37 -
おわりに.....	- 40 -



## はじめに

この度、高校模擬国連国際大会への8回目の日本代表団派遣支援事業の報告書を皆様にお届けできる運びとなりました。本事業にご共催いただいた公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターをはじめ、ご支援いただいた関係省庁・団体、ご協賛、ご協力いただいた企業・法人等、多くの皆様からの温かいご支援・ご高配を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

本事業では、2013年11月16日-17日に東京の国連大学で行われた第7回全日本高校模擬国連大会において優秀な成績を収めた6校12名の高校生が、日本代表団として国際大会に参加いたしました。日本代表団は、クウェート国大使として世界20カ国、総勢約1500名の参加者を前に、今大会においても見事な存在感を発揮していました。

本報告書で大部分を占めているのは日本代表団12名の高校生の報告です。12名の高校生がアメリカ・ニューヨークでそれぞれが担当する会議の議場において感じたことが全て記されています。会議前、会議中、そして、これからの将来に向けて各人の様々な思いが読み取れる内容です。その思いが今後のそれぞれの活動に少しでも刺激を与えるものとなるのであれば、私どもとしてこれ以上の喜びはありません。

最後に、本書が多くの人に読まれ、日本における高校模擬国連活動の更なる普及と発展の一助になること、そして、これから国際舞台に関わろうとする多くの人の活力につながることを期待しております。今後とも、グローバル・クラスルーム日本委員会へのご支援・ご指導をよろしくお願いいたします。

グローバル・クラスルーム日本委員会  
2014年度 理事長 立花 裕太郎

## グローバル・クラスルーム

グローバル・クラスルームは、国連会議のシミュレーション(模擬国連)を通じて、現代世界における様々な課題について学ぶための先進的な教育プログラムとして、公立中学校・高校を対象に、米国国連協会の提唱により始まりました。模擬国連に参加する学生は、国連加盟国の大使として、国際問題を討議し、決議案を作成し、賛成者・反対者と交渉し、国連の手續規則を駆使して、世界が直面する課題の解決に向けて、「国際協力」を実現していきます。

米国国連協会は、このグローバル・クラスルームを米国諸都市のみならず世界各地に普及させることで、国際理解教育と模擬国連の良さを多くの国の学校と共有するとともに、模擬国連コミュニティの裾野を広げようとしています。グローバル・クラスルームは、既に中国、インド、ドイツ、レバノン等で始まっています。グローバル・クラスルーム日本委員会は2007年に組織され、同年の第1回日本代表団の国際大会への派遣を皮切りに高校生の模擬国連活動が始まりました。参加校の数は増加傾向にあり、グローバル・クラスルーム日本委員会はこれからも模擬国連活動の普及に努めてまいります。



## 企画概要

### 【企画名称】

高校模擬国連国際大会への第8回派遣支援事業

### 【主催】

グローバル・クラスルーム日本委員会

### 【共催団体】

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

### 【期日】

2014年5月13日(火)～19日(月)

### 【開催場所】

米国ニューヨーク市

### 【内容】

5月中旬に米国国連協会の主催により開催される高校模擬国連国際大会(15th Annual Global Classrooms International High School Model UN Conference)に、グローバル・クラスルーム日本委員会主催の第7回全日本高校模擬国連大会(Global Classrooms in Japan 2013)にて選出した高校生が日本代表団として参加することへの支援。同大会には米国国内を含む世界20か国から総勢約1500名の高校生が参加しました。

#### 1) 日本代表団 (12名)

大阪教育大学附属高等学校池田校舎  
中村 詩音、山田 修平

実践女子学園高等学校  
大塚 麻友、村井 亜里紗

渋谷教育学園渋谷高等学校  
孫 昱棟、高橋 佑太

渋谷教育学園幕張高等学校  
板垣 奈恵、高佐 綾菜

聖心女子学院高等科  
徳永 理華、安田 侑加

灘高等学校  
小坂 真琴、村田 幸優

#### 2) 引率者 (6名)

大阪教育大学附属高等学校池田校舎  
梶木 尚美

実践女子学園高等学校  
奥井 雅久

渋谷教育学園渋谷高等学校  
室崎 撰

渋谷教育学園幕張高等学校  
森脇 浩

聖心女子学院高等科  
平方 久美子

灘高等学校  
木村 達哉

#### 3) グローバル・クラスルーム日本委員会 (3名)

東京大学 教養学部総合社会科学分科  
松野 雅人

東京外国語大学 言語文化学部英語科  
青柳 沙耶

聖心女子大学 歴史社会学科国際交流専攻  
逢坂 瞳

#### 4) 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (1名)

青木 文



## 派遣報告

### 【派遣日程】

- 4月20日(日) インフォメーション・セッション  
 5月13日(火) 成田空港出発  
 NY 到着  
 現地校訪問  
 5月14日(水) 国連日本政府代表部訪問  
 国連平和維持局訪問  
 5月15日(木) 国連クウェート国  
 政府代表部訪問  
 模擬国連開会式  
 5月16日(金) 模擬国連会議 1 日目  
 5月17日(土) 模擬国連会議 2 日目  
 5月18日(日) NY 出発  
 5月19日(月) 日本帰国

### 【参加会議】

高校	参加者	担当会議	議題
大阪教育大学附属 高等学校池田校舎	中村詩音 山田修平	Economic and Social Council (ECOSOC)	EDPs: Environmentally Displaced Persons and Social Vulnerability
実践女子学園高等 学校	大塚麻友 村井亜里紗	United Nations Environmental Programme (UNEP)	Protecting the Arctic
渋谷教育学園渋谷 高等学校	孫昱棟 高橋佑太	Food and Agricultural Organization (FAO)	Sustainable Diets: GMOs
渋谷教育学園幕張 高等学校	板垣奈恵 高佐綾菜	Human Rights Council (HRC)	Uses of Unmanned Aerial Vehicles (Drones)
聖心女子学院高等 科	安田侑加 徳永理華	World Health Organization (WHO)	E-health: Using Technology to Improve Global Public Health
灘高等学校	小坂真琴 村田幸優	International Monetary Fund (IMF)	Big Debt: Loan Reform and Forgiveness

## 4月20日

### 【インフォメーション・セッション】

渡米前の会議準備の集大成として、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)にてインフォメーション・セッションを開催しました。本会では、グローバル・クラスルーム日本委員会から渡米中の注意を共有し、その後派遣生による英語での政策発表会、ディスカッションを行いました。まず、派遣生は、本委員会評議員による激励の言葉を受け、高校模擬国連活動の歴史や日本代表団の重みなどを感じ、少々緊張した面持ちでした。

外務省国際保健政策室 WHO 担当の下荒磯誠様、外務省地球環境課 UNEP 担当の高橋友紀様、外務省国連企画調整課の水野光明様に、派遣生による政策発表会にご参加いただきました。政策発表会では、派遣生が国際大会にて提案する政策を英語でプレゼンテーションしました。英語での発表やそれに対する外務省の方のフィードバックを通して、担当会議・議題の理解を深める良い機会となりました。

国際大会では、全て英語にて議論が行われます。そこで、最後に、英語での議論に不慣れな派遣生のために英語でのディスカッションを実施しました。派遣生は、英語をただ話すだけでなく、英語を使って考え、交渉することの難しさを痛感するとともに、残された準備期間で何をすべきか各々が考えているようでした。



## Day 1

### 【日本出発・ニューヨーク到着】

成田国際空港からニューヨークのジョン・F・ケネディ国際空港へ向けて出発しました。到着後の自由時間では、派遣生はマンハッタンのビル街を歩き、ニューヨークに来たことを実感していました。

### 【Buddy School (現地校)との交流】

高校模擬国連国際大会を主催する米国国連協会の紹介を通じ、Hillcrest High Schoolとセントラルパークにて交流をしました。

英語を使う良い機会になっただけでなく、同年代の高校生に出会うことができ、派遣生は非常に充実した時間を過ごしているようでした。



## Day 2

### 【国連日本政府代表部訪問】

国連日本政府代表部総務公使の清水信介様を表敬訪問しました。

清水信介様に、「日本の国連外交」というテーマの下お話しいただくとともに、高校模擬国連国際大会に向けて派遣生への激励のお言葉をいただきました。



## Global Classrooms



【国連平和維持活動(PKO)局訪問】

国連平和維持活動(PKO)局を訪問し、渡辺政務官と石川政務官からお話を伺いました。石川政務官ご自身が模擬国連活動をされていたということもあり、模擬国連が人生に及ぼした影響などのお話を伺いました。派遣生それぞれが国連について改めて考える、またとない機会となりました。



【高校模擬国連国際大会開会式】

開会式は国連本部にて行われ、派遣生たちはバディースクールで出会った生徒や周囲の生徒、会議スタッフと談笑し交流を深めていました。しかし、開会式が進むにつれ、翌日に迫った会議に向け皆改めて気を引き締め直している様でした。



## Day 3

【国連クウェート国政府代表部訪問】

クウェート政府代表部にて、三等書記官 Farah Algharabally 様によるセッションが執り行われ、クウェート国についてブリーフィングをしていただきました。実際のクウェート国の外交官からのアドバイスを通じ、派遣生の政策を洗練する良い機会となりました。派遣生は自らの参加会議での議題以外の事柄についても熱心に質問しており、担当国であるクウェート国に対する理解を深められたようでした。



## Day 4

【高校模擬国連国際大会 大会 1 日目】

滞在していたグランドハイアットにて模擬国連会議が行われました。

200名以上が集まる会議や、少人数の作業部会など、参加する会議規模は様々でしたが、全ての派遣生が、自らの準備の成果を出すべく、懸命な交渉をしていました。

## Global Classrooms



初日の会議終了後、派遣生はそれぞれが気持ちを切り替えて、翌日に向けた準備を入念にしていました。

## Day 5

【高校模擬国連国際大会 大会2日目】

初日と同様、グランドハイアットホテルにて会議が行われました。

派遣生は、前日の議論を踏まえて練り直した会議戦略をもとに、自らに有利な決議案成果文書(DR)の採択に向けて、他の参加者たちと粘り強く交渉していました。



【高校模擬国連国際大会閉会式】

会議終了後、開会式と同様、国連本部にて閉会式が行われました。閉会式では、渋谷教育学園幕張高等学校が国際大会への派遣支援事業が始まって以来初となる最優秀賞(Best Delegation Award)を受賞し、渋谷教育学園渋谷高等学校と聖心女子学院高等科が優秀賞(Honorable Mention Award)、大阪教育大学附属高等学校池田校舎がベスト・ポジションペーパー賞(Best Position Paper

Award)を受賞しました。

派遣生は、大きな疲労の中、会議を無事に終えることが出来、満足しているようでした。



## Day 6・7

【ニューヨーク出発】

長くも短くも感じた全日程を終え、ジョン・F・ケネディ国際空港を出発し日本に帰国しました。派遣生は達成感に満ちあふれた表情でした。



## 受賞

本年度、日本代表団は国際大会において大きな成果を残しました。

渋谷教育学園幕張高等学校は、議場をまとめ議論を引っ張る会議行動が評価され、最優秀賞(Best Delegation Award)受賞という快挙を成し遂げました。

渋谷教育学園渋谷高等学校と聖心女子学院高等科の2校は、立場の大使をまとめて決議案(DR)作成でリーダーシップをとったことが評価され、優秀賞(Honorable Mention Award)を受賞しました。

大阪教育大学附属高等学校池田校舎は、優れた政策を提示した参加者へ贈られるベスト・ポジションペーパー賞に輝きました。

### 【最優秀賞(Best Delegation Award)】

#### 渋谷教育学園幕張高等学校

板垣 奈恵、高佐 綾菜



### 【優秀賞(Honorable Mention Award)】

#### 渋谷教育学園渋谷高等学校

孫 昱棟、高橋 佑太



### 【ベスト・ポジションペーパー賞 (Best Position Paper Award)】

#### 大阪教育大学附属高等学校池田校舎

中村 詩音、山田 修平



#### 聖心女子学院高等科

徳永 理華、安田 侑加



グローバル・クラスルーム日本委員会 理事長補佐

初めに、今回の派遣支援事業にご協賛・ご協力及びご後援頂いた全ての諸団体の皆様並びにグローバル・クラスルーム日本委員会に関わって下さった、全ての皆様に御礼申し上げます。

5年前、私は国連大学で毎年行われる全日本大会に参加していました。その前年にニューヨークへの切符を手にする事ができなかった悔しさを力に変えて、「今年こそは国際大会に行きたい」という強い思いをもって、何か月もペアとともに準備を重ねて臨んだ会議でした。しかし、残念ながらその年も優秀賞に選ばれず、私は高校での模擬国連活動を終えて大学受験のための勉強を始めました。一年後、無事大学に合格した際に、模擬国連活動で出会った大学生の方に「大学でも模擬国連を続けたいか」と声をかけていただきました。今振り返ると、あの瞬間は私の人生の転機のひとつでした。その方をはじめとする模擬国連に関わっている方々から紹介された様々な活動に参加した結果、グローバル・クラスルーム日本委員会にも出会ったのです。

## 参加者報告(アドバイザー)

本事業今回の国際大会同行にあたり、私は渡米前に「第8期派遣団が、努力の成果を最大限に発揮できる環境をつくる」ことを渡米中の目標に決めました。派遣生の議題についての知識の豊富さや行動力については、全日本大会での彼らのパフォーマンスや渡米前の準備への熱心さから、全くと言っていいほど心配していませんでした。あとは、ただ努力の成果を十分に発揮し、会議を楽しんで欲しい。それが、派遣生に関わる全ての人の共通の思いでした。私は理事長補佐として、派遣生が充実した時間を過ごすことが出来るように、渡米前はもちろん現地に着いてからも、米国国連協会と積極的にコミュニケーションをとるなどして派遣生にとって最善の環境作りに努めました。

そして、本グローバル・クラスルーム日本委員会にとって悲願であった、初の最優秀賞をはじめ、2校が優秀賞、さらに1校がベスト・ポジションペーパー賞を受賞したことは、

**青柳 沙耶**

東京外国語大学 言語文化学部英語科 2年

運営に関わってきた者としてこの上ない喜びでした。もちろん賞を取ることも自体も大変難しいことですが、数々の困難を乗り越えて国際大会で実力を認められ受賞したことは、派遣生の大きな自信になったと思います。また、彼らの様な存在が増えることで、今後の日本における模擬国連活動の普及にもつながるものだと信じています。彼らの背中を追う高校生がこれからますます増えることを心から願っています。

模擬国連はチャンスそのものです。議題に関する知識、何か月にも及ぶ準備の中で見つかる自分の強み、会議で出会った人たちとのつながりなど、全てが必ず将来の夢を掴むチャンスになります。特に模擬国連を通して出会う人たちとのつながりは、その後の人生を左右しうる、何ものにも代えがたいものです。一人でも多くの高校生にチャンスを提供するために、これからも模擬国連活動の普及に邁進していく所存です。

最後に、改めまして、本事業にご支援頂いたすべての皆様に、厚く御礼申し上げます。今後ともグローバル・クラスルーム日本委員会へ変わらぬご厚誼賜りますようお願い申し上げます。

## 松野 雅人

東京大学 教養学部教養学科総合社会科学国際関係論3年

グローバル・クラスルーム日本委員会 研究担当

「卓越」と「成長」。今回の派遣プログラムを通じて高校生に投げかけたのがこの2つの言葉です。

大学で模擬国連を行っている経験を活かして、会議に向けての準備段階で高校生をサポートする、それが研究としての私の役割でした。派遣のための準備期間は約半年。派遣生が貴重な高校時代の半年間を捧げる事業として、この派遣プログラムを真に意義のあるものにするには何が必要か。これが初めに向き合った問いでした。例えばニューヨークに行けたから、国際大会に出場できたからそれで満足、というのでは、このプログラムの意義を十分に達成できないのではないかと。模擬国連という活動の特性を最大限生かして、派遣生に何を遂げてほしいのだろうか。その中でたどり着いた一つの答え、それがこの二つの言葉でした。

模擬国連とは非常に多種多様な可能性を秘めた活動です。純粋に勝ち負けを争うゲームとして楽しむ、国際問題について多角的視点から学ぶ、情報収集能力・思考力・発信力など様々なスキルを身に着ける……。模擬国連を通じて何を得るか、模擬国連をどのように捉えるかは本来個々の参加者の自由です。しかし、何でもできてしまうからこそ、それを自覚的に位置づけ、確かな実りを得ることは容易ではないと感じます。そこで今回のプログラムを通じて派遣生に期待したのが「自分と向き合う」ということ、そしてその実現のためのキーワードとして「卓越」と「成長」を掲げました。

現状に満足せずさらに上を目指す「卓越」と、何事をも糧として常に自分を一歩ずつ前進させる「成長」。自分の強みと弱みを発見し、自分に足りないもの、変えたいこと、達成したいことを見定め、それに挑む。この高い要求に対して派遣生は真摯に向き合い、積極的に応えようとしてくれていました。その具体的な内容についてはこの後の参加者報告の中で、彼ら自身の言葉で書いてくれています。他の活動ではそう簡単には得られない実りを、このプログラムを通じて派遣生が獲得してくれていたならこれ以上の喜びはありません。

## Global Classrooms

「全力だからこそ楽しめる。楽しむからこそ全力になれる。」今回の派遣プログラムを通じて、派遣生に教えてもらったことです。

派遣生と向き合っていて、とにかく驚かされるのはその全力の姿です。会議本番はたった2日間ですが、派遣生はその2日に向けて4か月以上前から様々な準備を重ねてきました。今回会議での担当国はクウェート国という、あまり日本にはなじみがなく、また世界的にもかなり特殊な政治・経済状況を持つ国でした。国自体について調べるにも情報源が限定されるような国でしたが、派遣生は自分の議題に直接関係ない事象についても丁寧に調べ、また議題に関連する情報は積極的に英語文献なども入手して準備を重ねていました。英語で書く課題についても文法や論理構成について何度も何度も推敲を繰り返して、少しでもよいものを目指して全力で打ち込む姿が印象的でした。

彼らの全力というのは、締切に追われて必死に何かをするという類のものではなく、何事にも最善を尽くそうと前向きに取り組む姿勢です。思い通りにいかない時も、この壁を乗り越えたときにきっと自分は成長できると捉えて、逆境をもチャンスに変えて楽しんでいたようでした。派遣プログラムの最後、2日間の会議本番ではその姿勢が特に現れていました。ネイティブの外国人に周りを埋め尽くされた特殊な雰囲気、日本の模擬国連とはまた違った独特の進行方法、会議で次々と起こる想定外の事態。普通なら縮こまってしまいそうな状況の中で、派遣生たちはむしろ生き生きと、それまで準備で積み重ねたことを自信に変えて臨んでいたようです。いつだって最善の努力を尽くし、自信を持っているからこそ思う存分チャレンジを楽しみ、楽しんでいるからこそ継続的に全力で取り組める。そんな「全力」と「楽しむこと」の好循環を彼らは見事に体現していました。

派遣事業を通じてそんな高校生の姿にしばしば魅せられながら、私自身、そんな高校生の全力に負けていられないと、いつの間にかむきになって全力で向き合っている自分にはしばしば遭遇したものです。それは私にとっても楽しい時間であり、それを提供してくれた派遣生に感謝したいと思います。

さて今回の派遣プログラムを通して、派遣

生は様々なことを見聞きし、肌で感じ、そして学びとってくれたことと思います。ただ彼らにとってこの派遣事業は、最後の2日間の会議が終わった瞬間に全て終わるのではなく、今後の人生に向けた初めの一步にすぎないのではないのでしょうか。

参加する高校生に対して、このように大きな可能性を秘めた機会を提供できたことは、グローバル・クラスルーム日本委員会の一員としてこれ以上の喜びはありません。今年で8回目の派遣となりましたが、これまでの多くの積み重ねがあって初めて今回の派遣事業があったということ、プログラム全体を通じて強く感じました。これまで本事業を創り上げてくださった全ての皆様に重ねて感謝申し上げます。グローバル・クラスルーム日本委員会として、今後も現状に満足することなく、更なる前進のために一心に努めてまいりたいと思っております。

## 逢坂 瞳

聖心女子大学 歴史社会学科国際交流専攻 3年

グローバル・クラスルーム日本委員会 副理事長

本派遣事業において、グローバル・クラスルーム日本委員会副理事長及び国際大会運営スタッフとして派遣団に同行いたしました。

多くの国から参加者が集まる「模擬国連国際大会」。私自身も大学模擬国連にて、国際大会に参加し、日本での模擬国連会議との違いをはっきり肌で感じたことがあります。そこで求められるのは、「圧倒的なプレゼンス力」。自国の主張に他国から注目と賛同を集め、議場全体を巻き込み、いかにそれらを決議案成果文書に載せることができるか。会議行動において重要であるこの存在感ですが、国際大会では、日本とは異なる議事の進行方法や言語の壁によって、発揮出来ないことが珍しい光景ではないでしょう。しかしながら、今大会で派遣生たちはそのような環境下においても、いかに自らのプレゼンスを発揮するか、自身の強みを見極め、ペア同士の互いの強みを活かし、会議に臨んでおりました。その上で純粋に会議を楽しみ、生き生きと交渉に臨む様子は私たち大学生も刺激を受けずにはられませんでした。そのことをさらに感じたのは帰国後、今回日本初の最優秀賞を受賞した派遣生 2 名による市長への報告会の際でした。

「お互いそれぞれの得意分野を理解し、それを活かした役割分担」「注目を集めるような圧倒的な存在感でなく、丁寧に関係を築いていく日本人ならではの会議行動」

このような会議行動をはじめ、自身の強みを理解し、環境に応じて活かしながら、他者を巻き込むこと、このことが今回の受賞を形にした要素であり、模擬国連活動以外にも今後存分に活かされることでしょう。

このようにして派遣期間、また会議準備のプロセスを通じて彼らが気づき得たものは、様々な経験を共有し築いてきたペアとの絆、昨年の全日本大会から始まった派遣生 12 人のつながり。そして自身の長所や短所、自ら

の可能性と向き合い、気づくことができた機会でもあったと思います。私自身も、4年前の11月に参加した全日本大会にて得た経験、そして多くの人との出会いは、人生において大きな転機となりました。国際社会への関心から大学では国際政治を専攻し、また模擬国連事業に貢献したいという思いから、現在理事として当時同じ会議に参加したメンバーとともに運営に携わっております。

大学でも活動が続ける中で、模擬国連とは、知識やスキルといった面のみならず、相互刺激を通じて得た様々な気づきや試行錯誤の繰り返しの中で自身の成長を見出すことのできる非常に魅力的な活動だとあらためて実感いたしました。当時、夢中になって楽しく取り組んできた多く出来事が、今では線として繋がり、現在の自身や環境が形成されています。

今回の派遣生達もまた派遣事業を通じて、どのような気づきを得て、どのような未来への展望を描いたのでしょうか。本この派遣事業を次なる挑戦のスタート地点として、新たな道を拓く第 8 期派遣団のさらなる活躍を楽しみにしております。

現在“Model United Nations”は世界規模の活動として各地で多くの国際大会が開かれ、日本でも「模擬国連」の名で全国に広がりを見せています。今後とも、日本国内で模擬国連活動がより一層広まり、多くの高校生がこの活動に取り組めるように、尽力してまいります。

最後に、今回の派遣事業に関わり支えてくださった公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターACCUをはじめ、ご支援ご協力頂いた関係各所全ての方々には感謝申し上げます。

## 中村 詩音

大阪教育大学附属高等学校池田校舎 3年

### 参加者報告（派遣生）

2012年11月の全日本大会を終えた時には、ニューヨークの国際大会に出場することは漠然とした夢から明白な目標へと変わっていた。それからは2013年の全日本大会に向けて思いつく限りの形で努力を重ね、ついに1年後、念願のニューヨークへの切符を掴むことができた。こうして高校生活の大部分を模擬国連に注いできた私は、集大成となる今回の模擬国連会議で、どんな状況に追い込まれたとしてもその場でできること全てを出しきりたいという一心だった。

そして会議を終えた今、望みを見事に達成することができた満足感に浸っている。

これからその集大成となった会議を、自分らしさを存分に発揮できたと感じている二つの場面に絞って振り返るとともに、世界の舞台に立つことで出会うことができた大使を一人紹介する。

まず、最も重要となったグループの形成について。会議開始直後一度目のUnmoderated Caucus(非着席討議)はやはり覚悟をしていたにもかかわらず、初めは周りの気迫とスピード感に圧倒されてしまった。初めからできるだけ自分たちのプレゼンスを高めたいと思っていながらも、ほとんど何も発言できぬまま時間が過ぎていった。このまま大きなグループに飲み込まれるのではどうしようもないと危機感を抱いた私はその場を離れ、少人数のグループ形成を試みることにした。この作戦の切り替えが功を奏したのだ。もともとあらゆる場面で人間観察をしがちな私は、既にこれまでの大使たちの言動をある程度インプットできていたので、「発言力が強く無くても、方針が合いそうで少数での議論を好みそうな人たちに声をかけてみた。すると見事に次々と誘いを快く受け入れてくれ、無事グループ結成に成功したのだ。このグループの結束力は会議が進むにつれ強まり、最後のDR(決議案)最終提出まで一つのチームとして動けたのだ。

私たちが参加した会議の規模は他と比べて小さかった。そのおかげで会議全体の流れ



## Global Classrooms

や DR グループの分かれ方を把握することは比較的容易だった。しかしそうとは言っても、全日本大会と同じくらいの参加国数となると Moderated Caucus(着席討議)で議長に当ててもらうのはなかなか難しかった。そう思っていた会議中盤、ほとんどの大使が自分の政策を紹介し終えた頃に、私たちにとってのチャンスが到来した。なんと、自分の政策については発言力が強い大使でも、議論が発展し専門分野に掘り下げていく段階になると、言うことが何も無くなっていくのだ。その結果、上がる手の数がひとまわり減り、当たりやすくなる。そこで私たちの幅広いリサーチに加え、経験がものを言った。どの分野の話になっても何かしらの意見を準備できていたおかげで、何度も自分たちの政策内容を織り交ぜながら発言することができた。流れに乗ってきた最中、更に嬉しい出来事が起きた。メモが回ってきて宛先を見ると、「フロントからクウェート大使へ」と。突然なことであまりピンときていないままメモを開くと、「I like the direction of your policy. Good debate.」なんと議長に自分たちの政策が認識されただけでなく、その方向性を支持してもらえたのだ。改めて自信を持った私たちは、その先より一層自分たちの政策を議場に対して発信することに尽力した。

このように私たちは初め雰囲気には圧倒され動揺しながらも、チャンスを実際に活かし、その場で自分たちができることを全て出しきったのだ。

国際大会ともなると世界中から個性あふれる大使が集結していたので、会議ではたくさんの魅力的な大使に出会えた。その中でも私が一番心惹きつけられた大使は一言で表すと「Passion の持ち主」だった。会議開始後初の発言の時点で既に、議場にいる全員の注目を引き付けていることが、雰囲気を感じとれたのだ。その理由は、その大使の目の輝き、前のめりの姿勢、話すときの抑揚など一つ一つの要素から、なんとしても周りに伝えたいという気持ちの強さがにじみ出ていたからだろう。よく耳にはするが、人の心を動かすために必要なのは論理でもテクニックでもなく Passion だということを、身をもって実感できた瞬間だった。そしてその瞬間、私もいつか誰かの心を動かせるほど

Passion 溢れる話をする、という新たな目標ができた。

これまでに参加してきた数々の練習会議、2回 の全日本大会、そして今回の国際大会。ついに高校生としての模擬国連活動を終えた今言えるのは、模擬国連ほど自分と向き合い、自分を知るような機会は今まで一度も無かったということである。

いくつもの議題と接する中で出会う特別惹かれる国際問題。政策立案を繰り返すことで見えてくる思考パターン。ペアとの準備で思い知らされる弱みや癖。会議後のトークで気づかされる思わぬ強み。これらの一つ一つの発見が私を少しずつだが成長させてくれた。そしてこの一通りの経験が、私の未来を切り開く原動力の源となることを確信している。

最後にこの派遣事業を支えてくださった皆様に感謝の意を表したいと思います。このようなかけがえのない経験をすることができたのは最初から最後まで一緒にパートナーとしてやってきてくれた山田、グローバル・クラスルーム日本委員会、ACCU、引率の先生方をはじめとする全ての方々のおかげです。ありがとうございました。



## 山田 修平

大阪教育大学附属高等学校池田校舎 3年

“飛行機でいい映画あった？”

“ジュリア・ロバーツとキャメロン・ディアズ主演のラブコメが楽しかったよ！”

ーこれはニューヨークの模擬国連国際大会の **Unmoderated Caucus**(非着席討議)中の会話だ。決してサボっているわけではない。大きいグループの端でつまらなさそうにしていたカナダ大使に話しかけたところだ。なんとか政策の話まで持っていく。仲間になってくれるようだ。議長が討議の再開を呼びかけ、次の **Unmoderated** でも一緒に組もうねと握手で締めくくる。雑談に握手に **High-five** に **Great!** 連発など、この会議の“ノリ”に入っていくことへの抵抗感は消え去り、今では心の底から楽しんでた。半年前の自分が今の自分をみたらどう思うのだろう、席に戻りつつふと思った。

少し時間を遡ろう。渡米前の冬、派遣生の先輩たちに国際大会での雑談の多さについて聞いたときは非常に驚いた。政策と外交の世界に浸る会議中に日常生活の象徴ともいえる雑談を混入させるのはあまりにお粗末に思えた。他にも外見の重要性やスピーチ力への偏重性など全日本大会との違いを聞くにつれ、正直に告白すると、国際会議への期待は薄らいだ。

しかし、私はそんな後ろ向きな気持ちで高校生活の集大成である次の会議に臨むわけにはいかなかった。向こうがどのような価値観で、どのような会議を用意しようとも、私たちは全力で入り込み、絶対に楽しむ！という目標を立てていたからだ。この目標は苦い記憶しか残らなかった全日本大会の反省でもあり、アメリカの帰国子女同士のペアとして第二の故郷に対する切実な思いでもあった。

そのため、主火力であるはずのリサーチと戦略にかかる時間を大胆に減らし、真面目すぎると見られないように明るめのスーツを用意したり、即席スピーチに散りばめるためのキャッチーで心に残るフレーズを書き留めておいたり、ホワイトボードに描くための相手の注意を引きそうな図を考案したりな

ど、今までと全く異なる準備に時間を費やした。政策立案とリサーチを得意分野としている私はこの変化を歓迎したとは言い切れない。しかしいくら素晴らしい政策を発表しようとも聞いてもらえる保障はなく、会議行動そのものに磨きをかけることが目標達成の上で最優先課題であることは明らかだった。

会議当日まで早送りしよう。最初の数時間はやはりというか、圧倒された。予測していたにも関わらずあらゆる面に違いを見出してしまい委縮してしまう。しかし時間とともに国内会議との差異点よりも共通点の方が目立つようになる。大使たちには幾らかの確率で私の常識やロジックが通用しなかったが、大抵の場合同じ基盤から発言しており、**Moderated Caucus**(着席討議)の使い方や **Unmoderated Caucus** の進行も国内の会議とそう変わらなかった。そうわかってしまえば私たちの経験量とリサーチ力が物を言う。**Moderated Caucus** での即席スピーチや **Unmoderated Caucus** での政策説明など、今会議のために必死に磨いてきた会議行動の数々も確実に自分の一部として生きている。だがあの異質な準備が最も役立ったのは、今なら冒険できる、と思えたことだろう。変化に対する許容性を手に入れた私は、先ほどから観察していた大使たちのノリとテンションを吸収・発散してみたいと思えたからだ。初めはおそろおそろ、徐々に大胆に。錆びついていたアメリカ人的感覚と日本での会議経験がようやく融合し、気づけば自分は大使たちと笑い合いながら、過去に類を見ないレベルで会議を楽しんでいた。

そんな中、大きなグループの端で暇そうにしている大使を発見した。敬遠していたはずの雑談で近づいてみたい、冒険心が再び私を掴む。

“よお！カナダやろ？楽しんでる？”

“クウェートの人！確か日本から来たんだよね？長フライトお疲れ様！”

“いやー映画を5本半も見てたし退屈しなかったよ”

“飛行機でいい映画あった？”...

会議が終わってみると、むしろこのような話の方が印象に残っていることに気づいた。そこで思うのだが、政策の話は、あくまで大

使になりきっている仮の自分の話に過ぎないのに対して、一見不真面目に見える雑談は紛れもない本物の自分の姿を反映し、大使たちに自分という人間を売り込んでいる行為なのではないだろうか。実際に今回の国際会議は大使たちの外交的(diplomatic)な姿勢に驚かされた。政策に賛成できなくとも、つい賛成したくなるような人柄を全面に出している大使たちが最も活躍していた。全日本大会の政策と外交の世界に浸かる雰囲気も好きである。だが大使たちには真面目さゆえに余裕がなく、反対意見に対してはつつい外交的な姿勢が欠けてしまうことも見かけられた。また政策がすべてと思いがちだった私としては、政策とともに自分自身を売り込んでいた今会議の大使たちの姿勢から学べることはとても多かった。

国際大会を見くびっていた自分は大いに間違っていた。帰国後、自分の浅はかさを心底反省している。そして改めてその場に行かないと、いや、その場にどっぷり浸らないとわからないことの多さを痛感した。国際大会は全日本大会と根本的な価値観からして異なる。どの会議でも、どのようなイベントでも背景とする価値観は少しずつ異なる。しかし怯まずにその価値観に飛び込んでみれば、必ず新しい発見に出会える。それは今会議で得られた最も貴重な経験だ。

最後となりましたが模擬国連活動、特にこの派遣支援事業へご協力、ご支援いただいた皆様への感謝を申し上げます。皆様のおかげで貴重な機会をいただくことができました。本当にありがとうございます。



## 大塚 麻友

実践女子学園高等学校 3年

2年前、パートナーである村井と初めて全日本大会を見学した。その頃は模擬国連というものがあることすら全く知らなかったが、白熱とした雰囲気の中、数時間2人で見学したときの感動は今でも忘れられない。そして、村井と一緒にやらないかと誘われて、切磋琢磨しながら、ずっと一緒にやってきた。気がついたら、もう2年がたっていた。あの頃は全日本大会に出場することが目標であったため、まさかこの派遣事業に参加できるとは夢にも思っていなかった。この派遣事業に参加できたことは本当にうれしく、今となってはかけがえのない思い出となった。

今回、私達はクウェート大使として、国連環境計画の会議に参加した。議題は「北極保護」についてだった。会議はとても大きく、自分達がのみこまれてしまうのではないかと心配になった。その不安を断ち切るため、自分達は約半年間、この会議のために様々なことを準備した。そして、この会議が終了した現在、私達は納得できた点や後悔している点が沢山ある。それらを準備期間から当日までで振り返ってみたいと思う。

まず、事前準備期間中はクウェートのことや北極についてなど概要から調べ始め、クウェートの利益、例えば石油輸出の確保についての政策を2人で議論しながら考えた。会議は主に環境問題をテーマに話し合いを行うだろうと想定していた私達は産油国として他国に非難されるだろうと思った。その対策として、再生可能エネルギー使用量の増加、北極の保護区の設置などを訴えようという話になった。他にもスピーチやDR(決議案)の準備も行った。そして、ニューヨークに到着してから当日までは、政策の確認やスピーチの練習を中心に準備した。期待や不安などの感情が複雑に混ざり合っている中、当日を迎えた。

会議1日目。前半は Moderated Caucus (着席討議)を中心に北極の動物の保護や北極評議会など色々な議題について自国の立場を様々な国の大使が主張し、後半は Unmoderated Caucus (非着席討議)がたまた

## Global Classrooms

に入り、主張が似ている国々で集合した。**Moderated Caucus** が全日本大会以上に多く入ることは事前にいろんな方から教えて頂いたため知ってはいたが、当日は自分の予想を超えた回数入ったため、少し戸惑ってしまった。そのため、最初は事前に決めていた役割分担がしっかりできていなかったが、すぐに場に慣れ、最後のほうは自分達から積極的に **Moderated Caucus** で自国の主張をすることができた。また、**Unmoderated Caucus** にて集合した国々が固まっていくつかのグループが形成されたのだが、1つのグループの中心国の1カ国として、そのグループの中心になれた点はすごく嬉しく思っている。しかし、1日目終了した後、気がゆるんでしまったせいか、2日目の準備や会議行動の確認をあまり行わず、派遣から帰ってきた現在、少し後悔している。

私達がサポートできたらなと考えている。



会議2日目。前半は1日目で集まったグループで **DR** を書き終わらせ、提出し、後半は前半で提出された6つの **DR** の内容や主張を確認し、投票を行った。私達の **DR** には北極条約を作るべきであるということや、保護区を設けるべきだという主張を盛り込んだ。他にも私達がクウェート大使として入れたくなかった主張を入れず、含めたかった項目をすべて盛り込めたことにはとても満足している。しかし、1日目ほど積極的にグループを動かせず、またあまり発言ができなかった。そして、最後に投票へと移った。6つの **DR** のうち、2つしか通らなかったが、私達の **DR** は無事通過した。他の国の大使達にも私達の **DR** が認められたと認識できて、今まで努力してきたよかったですと感じた。

これまでの模擬国連生活を振り返ってみると、達成感、後悔など色々な感情が芽生えたが、特に次のように思った。もちろん、国際大会で受賞することはできなかった悔しさもあるが、自分達ができることを全てやることができたと思う。そして、今まで参加してきた会議の中でこの国際大会が一番積極的に行動することができたと感じ、本当に満足している。なかなか経験することのできないこの派遣事業を将来に活かしたい。また、私達はこれまで本当に沢山の方々に支えられて、ここまでやってこられたと思う。次は

## 村井 亜里紗

実践女子学園高校 3年

国際人とは何か。ある人から聞いた。国際人とは何かを。その人の言う国際人とは、本気で喧嘩して本気で仲直りできるやつ、それが国際人だそうだ。

もし、これを国際人の定義とするのであれば、模擬国連国際大会での私は、“国際人”ではなかった。勿論、本気で会議に臨んだし、準備にだって手を抜いてはいない。ただ、本気で相手にぶつかって行ったのかと聞かれたならば、その場の空気にもまれ、気後れしたと言うしかない。しかし、今回の会議が今までの中で一番リラックスして、一番楽しかったというのも事実だ。

中学3年生の時に会った模擬国連。何をやる会議なのかさえ知らなかった。国際政治に特別興味があったわけでもない。しかし、自分たちとさほど年の変わらない高校生達が、目まぐるしく議論を交わしているのに触発され、私もいつかこの舞台に立つ。そう決めたのを覚えている。その瞬間から早3年。努力の結果、憧れの全日本に立てた。全日本では、賞にこだわらず、出来るだけ多くの人と交渉しよう、そして3年分の思いをぶつけよう。と、いう勢いで参加した。そして、ソマリアという、無政府状態と言っても過言ではない国の大使をやる事になったときは絶句したが、自分たちに出来る事を精一杯やった。結果、思ってもみなかったニューヨークの切符を手にした時の感動と決意は一生忘れないだろう。

国際大会での国はクウェート。担当した議題はUNEPによる“Protecting the Arctic”石油大国でありながら、北極保護について語るなんて、どうすればいいのだろうか。日本人としてなら単純に、“石油を減らせばいい。二酸化炭素を減らそう”でいいが、私はクウェート大使だ。クウェートの財産のほとんどが石油から来ている。石油を持っている国が環境問題について何を言えるのだろうか。半年間この矛盾ととことん戦い、私はクウェート大使としてPosition Paperを提出することができた。そして私は、たくさんの人に激

励され、助けられ、自分の欠点と向き合ってきた半年間を信じて、ニューヨークへ飛び立った。

模擬国連国際大会1日目、とりあえず始めに気がついたのは他の大使に緊張感がないことだ。だらしない、とかそういう意味合いではなく、本当に緊張していないことが会場の空気に表れていた。まず、集合時間が皆ギリギリである。全日本ではほとんどの人が挨拶や、自席のチェックのために20分前には集まっていたのに比べ、国際大会では5分前になってラッシュアワーが始まるような状態だった。衝撃的であった。だが、それより驚いたのはModerated Caucus(着席討議)の多さだ。聞いてはいたが、日本では会議2日間合わせて3回あるかないかのModerated Caucusがスピーチを差し置いて行われているのにはカルチャーショックを受けた。Unmoderated Caucus(非着席討議)を呼びかけても、議長裁量により却下。スピーチも10人までで止まってしまい、仕方がなくModerated Caucusで喋る事に。Moderated Caucusの練習をあまりしてこなかった私には痛手であった。何とか、工夫してきたメモを活用し、似た考えを持っている大使に送っていった。その後、やっと訪れた10分間のUnmoderated Caucusで交渉開始。交渉の際の英語には困らなかった。むしろ、思ったよりもスムーズに交渉が進み、昼食前にはある程度グループの構成が完成していた。自分達の準備してきたDR(決議案)も気に入られ、軸としてはそれを使う事に。本当に順調だったのだ。クウェートだからと言って変な言いがかりを付けられる事もなく、石油を減らせ、と言われる事もなかった。全日のように、一日の終わりに仮DRの提出を急かされることもなく、会議1日目は楽しく過ぎた。部屋に戻ってからはDRの直しをパートナーが行い、私はその日できなかったスピーチの練習をした。そして、明日の会議行動を確認し、全日のように徹夜などもせず、その日は終わった。

会議2日目、再開すると思われたスピーチリストは閉ざされたままであった。その点にショックは受けたものの、パートナーと役割分担をし、私はSignatory集めに掛かっ

## Global Classrooms

た。前に出る事への不安を何とか抑え、アメリカ流のあのフランクな感じで交渉した結果、31国もの国の Signatory を集める事に成功した。クウェートは Sponsor として DR を提出する事ができ、且つ自分達の入れたかった政策を入れることが出来たので満足だった。投票時も 6 つの DR 中可決された 2 つの DR の中に入る事もでき、ホッとした。

しかし結果、賞は取れなかった。期待していたが、名前を呼ばれる事はなかった。自分達は何が足りなかったのか。落ち込みながら考えてみて、出てきたのが冒頭の国際人の定義である。私達はきっと“本気で喧嘩して本気で仲直りできるやつ”ではまだ、なかったのだ。時には人に嫌われる勇氣も必要なのかもしれない。表彰されていた大使達は正直に言って、交渉時に私が手こずるような、苦手なタイプの人達ばかりであった。しかし彼らは、他の大使達とぶつかりながらも、交渉を上手に進めていた。スムーズに会議が進む事だけがいいことではない。相手にいかに自分の意思を伝え、最初は上手くいかなくても、最終的には同調していけることが重要だったのだ、と今回の模擬国連を通して私は気がついた。私は、交渉中の喧嘩を恐れていた。失敗を恐れていた。もし相手の大使を怒らせた場合の英語の壁に、きっと自信がなかったのだ。それに、自分達が半年間頑張ってきた政策を台無しにしたくなかった。でも、それは“逃げ”になっていたのかもしれない。

5月18日をもって、私の高校模擬国連は幕を閉じたが、今回の国際大会を通じて、私は国際人の真理に近づけたように思う。“本気で喧嘩して本気で仲直りできるやつ”に私もなりたい。これを世界への一歩として、ここから私の国際人へのスタートを切りたいと思う。

最後に、この模擬国連と出会ってからの3年間、私の世界は変わりました。このような貴重な経験をさせてくださった関係者の方々や支えてくださった皆様に、この場を借りて、厚くお礼申し上げます。本当にありがとうございました。



## 孫 昱棟

渋谷教育学園渋谷高等学校 3年

模擬国連を楽しみたい！

そう心の底から思えたのは、なにもかもが吹っ切れた国際大会最終日だった。もちろん、それまでの準備も全日本大会も、自分で納得のいく行動をとることと楽しむことの二つを目標にはしていた。しかしどこかに納得できない点や、やりきれていない点があったのかもしれない。今回の会議において反省点はいろいろあるが、最終日に晴れやかな気持ちで会議に臨めたことをうれしく思う。このようなすばらしい機会をくださった皆様に感謝するとともに、模擬国連大会の概要、実際の会議行動、全体を通じての感想に分けて記していきたい。

全日本大会と国際大会を通じて再確認したのは自信をもつことの重要性だ。自信を持つために必要なものは、実際の経験とその議題に関してどれだけ思い入れが強いにかかっていると僕は思う。特に思い入れについては、事前の準備の段階でどれほど深くリサーチに打ち込んだかが鍵を握る。ポジションペーパー一つとっても、政策を一つ立案するにしても、多角的な視点から評価し何度も修正することで、その問題に対して自分なりの考えを持てるようになると思う。パートナーと一緒に考え抜いて作った政策や会議行動計画は、想定外の事に対処する上で一番の力となるということ、会議を通じ改めて感じた。また、実際の経験については、チャンスに恵まれないと会議の経験は得られないと思いがちだが、実際の日常会話やパートナーとの議論の際にも十分に練習できる。相手の話をまずは聞き、そして相手が共感できるように話をしながら、自分の言いたいことを簡潔に伝えようことはとても重要だ。もちろん全米大会が最終的な人生のゴールというわけでは決していないから、全米大会を大きなチャンスと思い、それによって成長しようというように割り切ったほうが、実際の会議を楽しめるかもしれない。

さて、今回僕が参加した会議は FAO(食糧農業機関)で、トピックは Sustainable diet: Genetically Modified Organisms (GMOs)、

遺伝子組み換え作物に注目した持続可能な食についてだった。クウェートという国の割り当てが決まった時から、石油という一つの莫大な資源にたよる砂漠の小国の危うさについて興味があった。特に食糧問題はクウェートの強みである資金力と弱みである国土の小ささ、食糧生産の絶対的な不足がどちらも深く関係しており、やりがいのある議題であった。遺伝子組み換え作物については反対か賛成かという対立軸がはっきりしており、国によって違う点ほどの程度反対よりなのか、または賛成よりなのかというところがあった。会議が思惑どおり動くとは考えられないので、できるだけ柔軟に対応するためにいろいろな政策や方針を持つておくことは、模擬国連に限らず重要な事だと思う。

国際大会は全日本大会と違い、いろいろな地域からの高校生とアメリカの議場で議論を闘わせる場である。会議の流れなどにおいて、想定外のことが起きることは想定できていた。今回僕とパートナーの高橋が参加した FAO の会議は参加大使が百人を超えており、英語発信能力が優れている人はたくさんいた。また会議進行は動議の提案からコンバイン交渉までフロントが中心になって行っており、大使達の行動にあまり干渉しない全日本大会とは大きな違いだった。

一日目、スピーカーズリストの七番目に自分達の担当するクウェートの名前が載ったところまでは順調だった。始めに六人の大使がスピーチを行い、次のスピーチはクウェートというところまでになった。しかし、ここで会議の進行について説明がはじまり、動議の募集に入った。渡米前から話には聴いていたが、動議が募集されるや否やたくさんの大使が我先にと手を上げ、着席討議 (Moderated caucus) を要求したのは圧倒された。ここで、手をあげて発言のチャンスを得られなかったことで、初日の午前は一度しか発言するチャンスを得られず、スピーカーズリストが回ってくることもなかった。スピーチが回ってきそうな度に準備したが、だんだんと発言するチャンスを逃していき、とにかく早く昼になってほしいと願うほど焦っていた。午後になると、着席討議によって議題の論点が共有され、ついに非着席討議 (moderated caucus) もとられた。大使達

## Global Classrooms

は、自然とスピーチの印象が強かった国に集まっていき、待ちに待った最初の非着席討議でも大使レベルでの意見交換しかできなかった。僕たちのペアが事前に思い浮かべていた会議戦略とは全く別の方向に進んでしまったため、大きいグループに入ることで、地理的に近い中東とアフリカの国々を集めた小さいグループを形成することに集中した。小さいグループである分、一人一人の意見が通りやすく英語力に抱いていた不安もあまり気にならなかった。英語力に自信がなくとも議題についてのリサーチと相手国の特徴がわかっているならば、ジャスチャーと必要最低限の英語で十分渡り合えると思う。その点では、小さいグループを組織していくことも効果的だ。今回僕たちはスケッチブックに紙芝居を書いて、政策説明の助けとした。ホワイトボードも好評であったので、準備の段階でこれらを使って簡潔に政策を説明できるようにすると良いと思う。

二日目は一日目から一転して、コンバイン交渉の嵐となった。一日目にできたいくつかの小さいグループの代表者がフロントの指示で議場の片隅に集められ、グループのメンバーの同意も十分に得られないままコンバイン交渉が始まった。フロントが二つのグループの決議案を見比べ、コンバイン後の内容までもほぼ決めてしまったことには驚いた。交渉が進むにつれ、クウェートの国益やグループの意見が採用されないことに一日目の午前と同じような焦りを感じていたが、グループで協議した内容とリサーチをもとにできる限りのことをやろうと心を決めた。状況は厳しかったが、自分とグループにとって最善の選択をとろうとすると不思議と楽しく感じられた。今までやってきたことや会議で得たことは確実に僕自身を支えてくれていると感じた瞬間であった。残念ながら、最後までグループとクウェートに直接利益があるような根本的な提案はできなかった。それでも、コンバイン後にグループのメンバーに説明できるよう、不利益になるところをそぎ落とし間接的に利益に繋がるような要素を提案したことは、今から思えば評価できる行動だったと思う。

会議が終わった後、僕とパートナーは想定外の事ばかり起こった議場において自分

達の持てる力は出し切ったと晴れやかな気持ちだった。幸いにも提出した決議案が採択され、最後に焦ってあきらめなくて良かったと心から思えた。優秀賞を授与された時、同じグループのメンバー拍手してくれたのを見てうれしくなった。この国際大会を通じ、自分が果たして本当に国益を守っているのか、最適な行動をとれているのかといつも疑問に思っていたが、迷いながらも自分のリサーチとグループのメンバーを信じて行動するしかないのも模擬国連大会の醍醐味である。その時にこそ、自分にどれだけ自信があるか、また思い通りに行かなくてもやれることは行うことが重要になる。全日本大会で選抜されてきた派遣生の皆さんは、十分にその力があると思うので、自信を持って会議を楽しんでほしい。

最後に、準備の段階から派遣事業が終わるまで本当にいろいろな方からご協力いただいた。今回の派遣で得た一番の成果として、多彩なバックグラウンドをもつすばらしい人々に出会えたことをあげたい。彼らと接することは本当に自分自身の成長にも繋がったと思う。この派遣事業を支えてくれた全ての方に感謝して、報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。





## 高橋 佑太

渋谷教育学園渋谷高等学校 3年

模擬国連国際大会。僕にとってこの大会は実に大きな意味を持ち、そこまでの道のりは実に長いものだった。

僕が模擬国連を知ったのは中学入学前。現在通っている学校の先輩がこの国際大会に出場した際の報告会を聞いたのが始まりだった。自分と年齢が数年しか変わらない高校生が世界を舞台に活躍している姿は、自分とは比べ物にならないほど大きな存在に感じた。それから今まで、このニューヨークでの大会に出場することを夢に抱き、少しでも先輩に近づく事を目指して模擬国連の活動を続けてきた。3年間を自分でも夢中で駆け抜け、数々の練習会、二度の全日本大会を経験し、気付くとこの国際大会の切符を手にしていった。

海外経験がほとんどない僕にとってこのニューヨークでの大会は大きな挑戦だった。文化の違い、言語の壁に大きな不安を抱きながらも、英語での会議をやりきることを会議の目標に据えた。

僕たちは **FAO** (Food Agricultural Organization/国際連合食糧農業機関) を議場とし、**GMO** (Genetically Modified Organisms/遺伝子組み換え作物) を主題とした会議に参加した。クウェート大使として、食糧配分の不平等性の是正、現状の支援システムの改善、遺伝子組み換えに関する技術についての国と企業との協力を主な主張として会議に臨んだ。会議が始まると早速言語の壁に激突した。スピーチや **Moderated Caucus** (着席討議) といった公式討議において各国の主張をうまく整理することができず、またフロントの議場コントロールにもついていくことが困難だった。しかし、**Unmoderated Caucus** (非着席討議) において自分たちの政策を説明し、小さいながらも主導権を握るグループを形成することができた。その後は、自分が議場のグループ形成の状況やその主張の把握に、パートナーがグループの包括にと役割を分担して会議を進めることができた。しかし、他グループとのコンバイン交渉にフロントが介入しフロントの意向にあったコンバインが進んでしま

ったことで、自分たちの政策が反映されず、また自分たちのグループ内の国々にも情報が共有されていない **DR** (決議案) が提出されることになってしまった。このようなことは今までの模擬国連経験の中で初めてであったが、そのまま会議を続けることしかできなかった。結局自分たちの主義に従うことができないまま会議を終えてしまった。

自分たちの政策とは異なる内容の **DR** が提出されることになってしまったこと、英語でのコミュニケーションがうまくいかなかったこと、**Moderated Caucus** やスピーチを活用できなかったこと等、様々な点で自分の無力さに悔しくなることもあったが、初めて日本の枠を超えた会議に参加し、日本とは異なる文化の下で議論し、意見を共有できた経験は、これからの人生にとって大きな意味を持つと思う。

ここで、今までの模擬国連の経験、それから今回の国際大会を通じて、自分なりに模擬国連の活動を行う上で一番大切だと感じたことを紹介したい。それは「自分の信念を持ち、それを貫く」ということだ。

模擬国連の会議における僕の信念は「より現実的で効果的な **DR** をより多くの国の賛同の下で可決させること」ということだ。

僕は模擬国連の会議の目標は、より良い世界を作り出すことにあると思っている。高校生が世界の問題に対して各国大使の立場から議論し合い、一つの **DR** を作っていく。その過程にスピーチや **Moderated Caucus** や **Unmoderated Caucus** があるのであって、それらはより良い世界を作るための手段に過ぎない。

ある一人が持っている意見や考えは、それが多くの人に共有されない限り実現しないものであって、その伝達のために印象的なスピーチが必要なのである。限られた時間で少しでも効率的に会議を進め、より効果的な **DR** を作り出すために議場を整理する **Moderated Caucus** が必要なのである。各国大使に公平に発言機会が与えられるように、また必死に自分の信じる政策を他国の大使と共有し実際に **DR** を書き上げるために **Unmoderated Caucus** が必要なのである。

しかし、それらはすべて会議の最後に提出される **DR** をよりよいものにするために必

要なのであり、決してそれがメインではないと僕は思っている。

その実現のために僕は議場を走り回るし、発言をする。だが、会議終了までに「自分たちが『どのように』会議に関わったか」は僕にとって特に問題ではないのである(もちろん、「どのように関わるか」が国益となる国や会議もあるが)。

あくまでこれは僕個人の考えであって、ある人は模擬国連を自分のパフォーマンスを鍛える場だと思うかもしれない。信念は一人一人違うものである。しかし、自分の信念のものさしで自分の行動を振り返った時、それを貫くことができたか否か、それが大切なことなのだと思う。

最後になりましたが、今回の派遣では本当に多くの方に支えられました。全日本大会からともに歩んできたペアの孫、家族や先生方、先輩や仲間、ともに最高の時を過ごした派遣性のみならず、松野さん、青柳さん、逢坂さん、そしてこの派遣に携わってくださったすべての方にこの場を借りて感謝の気持ちを申し上げます。本当にありがとうございます。



## 板垣 奈恵

渋谷教育学園幕張高等学校 3年

<はじめに>

今回私はクウェートの大使として“Human Rights Committee(人権委員会)”において“Uses of Unmanned Aerial Vehicles (UAVs)(無人機の使用)”を議題とした会議に臨んだ。無人機の使用については比較的新しい議題であるので、私は自由な発想で政策案を考えていけると感じた。また、対立軸もあることから交渉のやりがいがある議題だと感じていた。無人機の使用は安全保障に関わる問題だが、今回の議題が人権委員会の場で話し合われるということは、安全保障と人権の尊重をどのように両立させるか、またはどちらを優先させるかを念頭におかなければならない。

<事前準備>

まず、事前調査として「クウェート」と「無人機の使用とその問題点」について調べた。どちらも私には馴染みのないものであったが、それらについての知識や情報を書籍や新聞、インターネットから集めた。無人機の使用については大きく「戦闘用」と「非戦闘用(平和的利用)」に二分され、前者については対立軸ができると予想できた。次に無人機の使用によって起きている問題について調べ、各問題の解決策を考え、自国の国益を最優先に政策案をまとめた。その過程では、無人機の研究に携わっていらっしゃる千葉大学の野波教授にお会いして「非戦闘用無人機」の最先端技術についてのお話を伺い、無人機の技術向上をうったえる政策案に活用させて頂いた。

政策案作成では次の3点を考慮に入れた。まずクウェートが過去に湾岸戦争で国内のインフラがことごとく破壊された苦い経験を持つこと。2つ目に産油国で戦争が起こると世界経済に大きなダメージを与えること。3つ目にクウェートのような小国は軍事防衛力を保持する必要があること。実際に、クウェートはテロリストや国境付近の監視・偵察のために UAVs を所有しており、一方で荷物運搬用などの非戦闘用の UAVs の研究開発にも取り組んでいる。そこで、UAVs の使用のマイナス面を改善し、国際的に合意

## Global Classrooms

した規約を定めたうえで UAVs の使用を推進するという立場を取った。さらに国益の最大限実現に加えて他国の大使にも受け入れてもらえるように国際益をも考慮した。

政策案を提出した後は、苦手だった即興スピーチとアウトプットの練習に取り組んだ。日本を発つ前日に、私は自分の政策に「4R: Referral(付託), Responsibility(責任), Reporting(報告), Refining(技術向上)」というキャッチフレーズを思いついた。このようなキャッチフレーズがあると、他の大使や議長に自分たちのことを覚えてもらえる先輩方から聞いていたので、「4R」が作れたときはとても嬉しかった。実際に議場ではスケッチブックに 4R を書き、言葉と視覚の両方からアピールした。

#### <実際の会議について>

模擬国連国際大会の初日、私はスタートから挫折感を味わった。会議が始まると今まで自分が主に担ってきた役割をペアが担う展開となり、カバーされていない役割を自分が担おうとしたが簡単ではなかった。つまり自分の理想通りに物事が運ばず、私たちの政策案に同意してくれる仲間を彼女が集めてくれている一方で、私が交渉していた大使達には受け入れてもらえない場面もあり、一瞬自分が何をすればよいか分からなくなってしまった。しかし、思うように物事が運ばないことは社会の中では多々あることだ。むしろ自分は本当の外交の難しさをスタートから体験でき、どのように壁を乗り越えるのかを試されているような気がしてきた。その後は「クウェートのために、世界のために」私はいつもこの言葉を胸にとめ、困難が立ちはだかる度に思い出しながら会議に臨んだ。自分の思い通りに会議が進まない時、自分の意見と対立する人が目の前にいる時、自分が何をすれば良いか分からなくなった時。そんなときにこの言葉を思い出すと、次に取るべき行動が見えてきた。それからは常にペアの動きを把握しながら彼女が担っていない役割をカバーするよう努力した。広い会場の中で会議全体の様子を見ながらこの役割を果たすのはとても難しかったが、冷静に焦らず自分の役割を見つけて取り組もうと心掛けた。また、時間配分にも気を配り、常に他の大使より先手を打つようにした。

模擬国連の会議の流れは、その場に立ってみないとわからない。想定外の連続であり、いかにその都度状況に応じて対処できるかが大切だ。たとえば、今回の会議では他の大使から突然、彼らのスピーチ中に「では、僕たちはクウェート大使に残りの時間を譲ります」と申し出があり、私は少し焦ったが冷静に自分の主張を思い返して、運良く落ち着いてスピーチをすることができた。また、会議の流れは議長裁量によって決定されることが多く、なかなか Unmoderated Caucus(非着席討議)を入れてもらえなかった。このように何度動議を挙げてでも採用してもらえない時は、自ら議長のところに行き「なぜ私たちが Unmoderated Caucus を必要としているか」そして「それがどう議事進行に役立つか」をきちんと伝えた。そうしたら、議長も快く納得してくれて Unmoderated Caucus を採用してくれた。このように無理と思えることでも地道に交渉をして、最後まであきらめずに粘り強く臨むことも大事だと実感した。結果的に今回の会議で多くの大使が私たちの政策に同意してくれたのは、彼らの主張を聞かせてもらった上で、私たちの主張を理解してもらおうと融和の姿勢で臨んだこと、政策案の内容に説得力があったことが功を奏したのではないだろうか。Moderated Caucus(着席討議)で私がスピーチをしている時に他国の大使たちが真剣な面持ちで聞いてくれ、うなずいたり、拍手をしてくれた時は感無量だった。

#### <おわりに>

今回の体験を振り返って外交の場で大切なことは何だろうと考えてみた。優れた政策案、議題に関する知識や正確な情報、相手の主張を聞いて理解した上で自分の主張を発信して行く力、柔軟性、苦境に立たされても気持ちを切り替えて困難に向き合う勇気と粘り強さ、ペアとの表裏一体のチームワーク。そして、社交性。私は会議の合間の休憩時間に居合わせた他国の大使たちと持って行った日本のお菓子を食べながらおしゃべりを楽しんだ。難しい議題からはなれて、たわいもないおしゃべりを交わしただけだが気持ちが和み、お互いに少し距離が縮まってその後の会議で話しがしやすくなった。外交は字のごとく人と人との交わりだから、少し

ずつでもお互いを理解し、親しくなることが大切だと思う。今回の国際大会に臨むにあたって私は、「世界の高校生と模擬国連を思いっきり楽しもう」と決めていた。終わってみると 2 日間の会議を通し内面的に葛藤しながらも無我夢中で会議に没頭し、私自身も一回り成長することができて満足している。

私が高校模擬国連大会に参加出来たことは、学校の先生や友達や家族の支え、ペアを組んで一緒に頑張ってきた高佐、そしてグローバル・クラスルームという団体のご支援があったからです。さらに、これまで模擬国連に参加された先輩方が実績を積み上げてきて下さり、私たちにつないでくださったお陰でこのような賞を頂く事が出来ました。この場をお借りして心から感謝の気持ちを述べさせていただきたいと思います。本当にどうもありがとうございました。



## 高佐 綾菜

渋谷教育学園幕張高等学校 2年

模擬国連とは何だろう。

答えは参加者一人一人の目的によって異なる。国際問題を知る場。新しい人と巡り合う場。リーダーシップとは何かを学ぶ場。交渉力を磨く場。または、賞を取る場。

今振り返ってみると、私にとって模擬国連は自分を探す、そして知る場だった。国際問題を知るにせよ、いろんな力を培うにせよ、それらを延長した先に常にあったのは「で、私は何ができるの?」という問いへの答えを探し回っている自分だった。

私が模擬国連を始めたのは去年の春、今から一年前だ。今回参加した国際大会は、そんな一年間にあったいろんなことの集大成になることは分かっていたが、今振り返ってみると、私のこれまで 16 年半の人生の、大きな節目になったのだと思う。

そんな貴重な経験をさせていただいたことへの感謝をいろんな方々へ表するとともに、私がこの派遣事業を経て何を得たかを、これから模擬国連という世界に入ってきてくれる後輩たちに伝えたいことも含めてここに記していきたい。

### ・すごくなくていい

私が模擬国連に関して最も悩まされたのは、自分が“すごい”人でないということだ。

今回私は国際大会で最優秀賞をいただいたが、私には飛び抜けた才能や天性のリーダーシップ、カリスマ性などない。スピーチもついこの前まで笑われてしまうほど下手だった。すなわち私は、最優秀賞と聞いて多くの人が想像するような、何かを超越する資質を備えた存在では全くないのだ。

結論から言うと、模擬国連に参加するにあたって“すごく”ある必要はない。私は国際大会で議論の輪の中心にいたことができたが、それは私が他を圧倒するほど輝いていたからではない。小さい体であちこち走り回り、母国語ではない英語で考えを伝えようとしながら何度も言葉に詰まってしまう様子を見て、周りのアメリカ人がこいつは一人じゃだめだ、助けてあげなければという素晴らしい親切心のもと、何度も助け船を出してくれ

## Global Classrooms

ていたのだ。

ここで一つ付け足しておきたいのは、私が“すごく”でなくてもよかった条件として、周りが優しかったことがある。これは会議だけでなく準備段階からのことだ。非常に膨大な時間を使う模擬国連に一年間携わっていた私は、その間多くの人のお世話になり、迷惑をかけてしまった。だが、その都度周りは私の模擬国連への気持ちを理解してくれた。

優しい人はこの世に案外沢山いる。だがその優しさに甘えることなく、助けてもらっていることへの感謝の気持ちを、謙虚さを、忘れないでいてほしい。

#### ・ Passion について

とある事情があって私は会議初日の昼休み、グランドセントラル駅という非常に広大な建物の中を、人を捜し求めて駆け回る羽目になった。そんな私の必死な様子を見て、一緒に捜してくれていたメキシコ大使の男子から「そんなに模擬国連に必死なのか」と聞かれた。私は非常に焦っていたため、答えを考える暇なく本能的に答えていた。

「No, I'm passionate to life.」

Passion の良い訳が思いつかないが、とりあえず自分のこの発言は、私自身に大きな影響を与えた。

もしアメリカ人達がただ親切心だけで私の周りにいてくれたのではなく、また板垣にだけ魅力を感じたのではなく、

もし、もし高佐に少しでも惹かれたのだとすれば、

それは「I'm passionate to life」。その考えとそれに基づいた行動だったのだと思う。

私は確かに“すごく”はないが、これまで沢山悩んで生きてきたし、生きることに對して手を抜いたこともない。助けてもらった人には常に感謝したくてたまらず、助けてもらった分は助け返すつもりでいる。そんな日頃の心構えがおそらく会議での行動につながり、この子はすごい、ではないが、悪くはない、と周りに感じてもらえたのだと思う。

何が言いたいかというと、Passion、すなわち何かに対する強い気持ちを持つことには、才能はいらない、誰でもできる。何かをしたい！と強く思えばそれは人に伝わるし、

その思いに共感する人は必ず何らかの形で手を差し伸べてくれる。まずは何かに対する Passion を持つこと、そして助け船を出してくれる人に対して謙虚にありがたく思い、その船にちゃんと乗ること。全ての最後は運かもしれないが、それらができたらきっといつか、運の女神は自分をどこかしらにたどり着かせてくれると思う。

#### ・ 賞とは何か

私は模擬国連に賞というものを全く求めなかった。むしろ賞という概念が嫌いだった。普通の競技とは違い、何を基準とすればいいのか曖昧な模擬国連において優劣をつけられることに戸惑いを感じていた。実際国際大会の場でも、会議が終わった直後、私はいろんなことを得たことと楽しめたことだけで十分満足していた。だが、今となってみればそれは非常に身勝手なことだったと思う。なぜか。賞は自分のためのものではないからだ。

「高佐が賞を取った」と聞いて、今まで支えてきてくれた人、すなわち私が感謝したい人たちが、元気になったり、嬉しくなったり、まあ高佐を支えといてよかったかを感じる。もしみんなにそうしてもらおうことができたのなら、賞を取ることは十分に意味を持つのだ。

ただ、賞を目指して会議に向かい、賞を意識しながら行動していたら、おそらく私は今回の国際大会をこれほど楽しめなかつただろうし、みんなも私を助けようとは思わなかつただろう。賞を取るということがどれだけ価値のあることかをちゃんとわきまえた上で、それを目指すことは絶対にしてほしくない。

#### ・ 最後に

この国際大会での経験と結果は今まで支えてきてくれた人たちがいたからのことだ。その人たちというのは、家族を始め、学校の人々、先生方、グローバルクラスルームに関わるすべての方々、そしてこの派遣事業にご支援、ご協力いただいた皆様のことです。

この場をお借りして、心から感謝を申し上げます。本当に、ありがとうございました。



## 徳永 理華

聖心女子学院高等科 2年

### <はじめに>

模擬国連大会は正解のない問いに挑み、自分なりの答えを導き出す知的冒険の連続です。丁寧な議題のリサーチや政策の立案は必須です。また、限られた時間を有効に使わなければなりません。体力的にも精神的にも無理を重ねることもあります。そして、失敗や挫折はよくあることです。これらを乗り越えるために私が大切だと思ったことは、目的意識を持って主体的に物事を選択することと逆境には楽天的に向き合うべきであるということです。そして、たとえバックグラウンドが違って、人と人をつなげるものは信頼関係でありそれを築くには誠実さが大切であるということです。

ここに私の経験を記すことにより、この素晴らしい機会を与えて下さった皆様へのご報告と今後高校模擬国連に取り組む高校生の皆様のご参考になればと思います。

### <会議準備>

1月。クウェート大使として世界保健機関(WHO)の **eHealth : Using Technology to Improve Global Public Health** へ参加することが決まりました。まず議題概説書を熟読することから開始しました。次に、WHOのサイトを検索し、時間はかかりましたが楽しみながら地道に英文資料に目を通しました。その結果、国連では **eHealth** 自体が比較的新しい議題であること、**eHealth** は様々な方法で医療分野に貢献できることやクウェートが **eHealth** の導入に積極的に取り組んでいるということが分かりました。そこから、WHOの理念とクウェートの医療事情等を考慮し”**eHealth for Preventive Strategy**”を政策とすることに決定しました。しかし、会議が政策共有型であるため、果たして他国がどのような切り口で政策を立ててくるのか心配材料は尽きませんでした。そのため、4月に行われたインフォメーションセッションでクウェートの事情をご存知のWHOの方にお話を伺うことができたことは、とても幸運なことでした。

## Global Classrooms

## &lt;会議：1日目&gt;

議場には83カ国の大使が参加していました。会議は予想通り全日本大会とは大きく異なり、Moderated Caucus(着席討議)と各国のスピーチが主で Unmoderated Caucus(非着席討議)の数は少なく時間も限られていました。

会議序盤はプラカードを積極的に挙げることを心がけていましたが、次々と変わる議論のテーマに思うようについていけず自身に歯がゆい思いを味わうことになりました。実際、午前中に1度発言権を得ることができたにもかかわらず、十分にこの機会を生かしたとはいえませんでした。途中 Unmoderated Caucus の動議も挙げましたが、同じタイミングに出された Moderated Caucus の動議が優先されました。一向に成果の上がらぬまま主にメモを回すことでDR(決議案)作成のグルーピングを模索することになりました。この時が2日間の会議の中で一番先が読めない不安な時間でした。なんとか気持ちを切り替え、インプットしてきたことを冷静にアウトプットできるよう会議の流れに集中するよう努めることに必死でした。

昼休み直前によくメモを回した何カ国かと Unmoderated Caucus で話し合う時間を持つことができました。互いの国益なども考慮しつつその場に集まった全員で自国の政策を発表し合いました。他国の大使たちは、言葉が上手く出てこない私の意見を我慢強く待ってくれ、臨機応変に対応してくれました。私の話を真剣に聞いてくれた彼らの礼儀正しい姿勢に感謝すると同時に、日常的にグローバルな環境で生活している彼らと自分の違いを改めて認識することになりました。また、その後の会議に積極的に参加できたのは、この時に私達の国の政策が好意的に受け止めてもらえていることを確認できたことが大きかったと思います。

昼食時にはシエラレオネ大使と今後の方向性を確認した他、当初クウェートが予定していたグルーピングと実際に出来上がったグループの比較を行い、DR作成に向けて他国の政策を整理し直しました。また、会議場が再び開くまでの時間も様々な大使と高校生同士の会話も楽しむことができました。”日本”を好意的に思ってくれていることを伝

えてくれた大使の多さには驚きました。今になって振り返ると、一見無駄なこの時間が友好的に会議を進めるために少なからず影響を及ぼしたと思えてなりません。

午後の会議の開始時に、director から方向性が似ていることからイラクを中心とするグループとコンバインを勧められました。グループのコンセンサスを得て、一緒にDRを作成することを決めると共にクウェートはそのスポンサー国になることも決まりました。しかし、このグループはもう既にDRをほぼ完成させていたため、それをベースにこちらのグループの政策を足してもらうことで話をまとめることになりました。その後の moderated caucus の各DRの中間報告では、私たちはDRの方向性を示唆する発言を行う機会を得ることができました。1日目のセッションは、イラクと合流する以前のグループの全ての国にそれぞれの政策のDRの文言を書いてもらい、それらを全てまとめイラクに渡すことで終了することができました。

会議終了後、director からレバノンを始めとするグループと組むのはどうかという提案もいただきました。しかし、既にグループを広げた後だったため乗り気でない国の大使も多かったので、2日目も頑張ろうという意思の確認にとどめました。

## &lt;会議：2日目&gt;

私達は1日目を終えた夜に、

1. DR案の見直し
2. スピーチの組み換え
3. 2日目の会議行動予想の組み立てを行いました。そして、2日目の課題として1日目に Unmoderated Caucus の動議しか挙げるができなかったのを、公式の発言機会を十分に生かせるよう Moderated Caucus の動議を挙げることにしました。そのため、会議開始前に議長への挨拶と共に決議案に関する Q&A を行う Moderated Caucus の動議の可否を相談しました。議長は快諾してくださり、その後 director にも了承を得ることができました。

順調に思えた2日目、イラクがまとめておいてくれた暫定のDRがグループに波乱を呼びました。そこにはクウェートの政策も含め、合流前のグループがまとめた文言が消え

## Global Classrooms

ていたからです。

午前の **Unmoderated Caucus** ではペアと別行動を取り、私は最初のグループのメンバーに最新の **DR** 内容の確認を行いました。グループ内の意見の調整後イラクのグループと合流し内容についての議論を進めつつ、英語ネイティブの皆に助けられながら慎重に最終の **DR** を仕上げる作業を行いました。

なんとか時間内に **DR** を提出後、グループの皆で **DR** の名前を考え、**"E-Project"** に決定しました。**Unmoderated Caucus** 後、動議を取っている時間などを利用して、政策のトピックを書き出して準備をし **DR** のスピーチを行う時間を頂くことができました。頭の中は自分のすべきことで一杯だったため、スピーチが終わった時に聞いた拍手と歓声にはとまどいでしたが生涯忘れられない思い出になりました。

その後すぐクウェートのスピーチの順番が回ってきたため、今度は議場の参加国全体で協調することの必要性を強調しました。直前のスピーチで雰囲気慣れてきたので、ジェスチャーを入れる余裕も生まれていました。ただ、会議最終のスピーチでもあったので聞いてもらえているか心配でしたが、議場からは再び拍手と歓声による賛同を得ることができました。

午後のセッションでは、まず印刷された **DR** が各国に配られました。その後、各 **DR** のスポンサー全員が前に出て質疑応答の時間が設けられました。ここでまた突発的な事態が発生しました。大会初日から行動を共にしていたバーレーンの名前がシグナトリーからもれていたのです。かなり焦りましたが、急いで **DR** を仕切ってくれたイラクにその旨を伝えると共に、議長席に向かい **director** に相談し無事に訂正ができました。最終的に、私達の **DR** は議場を通過することができませんでした。質疑が多かったこと等から、残念ながら私達の内容確認の不足が原因だったのだと思います。しかし、私自身は使用言語が英語であったにもかかわらず、目的意識を持って会議に真摯に向き合えたという充足感を得て会議を終了することができました。また、クウェート大使として1月以来インプットしてきたことを十分にアウトプットできたことにも満足しています。

<おわりに>

私が模擬国連大会を通して感じたことは、状況をコントロール”できるかどうか”ではなく、”できると思うかどうか”がその成否を決めるということです。また、何かを選択するというはその状況が生み出すものではなく、自分の意思が生み出すということです。そして、主体的に物事に取り組みれば必ずとその結果の如何にかかわらず満足できるということが分かりました。会議に参加することで異なる言語や文化的背景をもつ人達と一緒に物事を進めることは、多様性を受容する力をもってこそ成り立つものであるということも学ぶことができました。そして同時に視野を広げるという意味は、自分の国のことを知り、語ることもできるということに気づくことができました。

今後はここで得たことを教訓として日本人としての自分を磨くことからじっくり取り組んで、時間をかけて国際社会の一員として何ができるのか試行錯誤したいと思います。そして、グローバルな視点を持つために、知的な力と共にそれを生かす社会的な力を鍛える努力を怠らず精進することが重要だと思いました。

最後になりましたが、この貴重な機会を与えてくださったグローバル・クラスルーム日本委員会の皆様、ユネスコ・アジア文化センターの皆様、いつでも励まし支えてくれた先生方や諸先輩方と友人達、そして同じ感動を共有した第8期生に心からの感謝を捧げたいと思います。





## 安田 侑加

聖心女子学院高等科 3年

Honorable mention の受賞チームとしてクウェートの名が呼ばれた時、今まで支え、励まし続けて下さった周りの方々の姿を一度に思い出し、感謝の気持ちと恩返しが出来たという思いでいっぱいになった。模擬国連を始めた高校 1 年生からこの国際大会までの長い道程の中で、たくさんのことを学び、成長させていただいた。今回の派遣では特に、冷静に物事を見極めた上で自分にできる最大限のことをする力が身に付いた点で成長したと思う。

私達は WHO の会議で eHealth を担当した。eHealth とは ITC 技術を活用した医療であり、医療水準を向上させるために eHealth をどのように活用していくかがテーマであった。そのため、幅広い活用方法があり、さらに参加国数も多かったため、いかに会議をまとめていくかが一つの大きなポイントとなった。そこで、私達の会議行動の基盤である協調性を生かし、会議をまとめることを目指した。また、帰国子女ではない分、英語での交渉は大きな壁であったし、アピール力は外国人に比べ圧倒的に低かった。そこで、皆と会議を楽しむことを目標に、学びを自分のものにし伝える、ということを準備段階から常に意識した。具体的には、パートナーと分担し、効率良くリサーチ量を増やすことで英語力を向上・補完させるのに加え、ネイティブと話す機会を積極的に設けたり、耳から入るものを英語に切り替えたりした。また、私達の政策を分かりやすく、印象的に伝えられるよう工夫し、練習を重ねた。

会議 1 日目は、メモで WHO の中東とアフリカ機構でのグループ形成を呼びかけることから始まった。Unmoderated Caucus (非着席討議) では、予め聞いた政策をホワイトボードにリストアップしていたので、皆で政策を正確に共有し、グループをまとめることができた。そして会議監督の指示で、政策が似ているイラクのグループに合流した。最初のグループの内、クウェートとシエラレオネはスポンサーとなったが、残りの国々はシグナトリーとなった。そこで、各シグナトリー

が DR (決議案) の内容に納得できるよう努めた。まず、イラクがほとんど DR を書き上げていたが、メモを活用して彼らの政策も反映させた。そして、DR 内容を説明する Moderated Caucus (着席討議) でイラクと共に DR 内容を説明した際、最初のグループで話し合っていた内容が DR に含まれていることを強調した。ただ、公の場において、その場で落ち着いて分かりやすく英語で説明することの難しさを実感したので、次の日の課題となった。

その後の Unmoderated Caucus では、会議監督を交えスポンサー同士で話し合った。しかし、英語での速い議論でのペースについていけず、とてももどかしい思いをしたまま、1 日目が終了した。夜は、大学生の方のアドバイスを元に 2 日目の作戦を立てた。さらに、1 日目の反省から、Moderated Caucus や活発な議論に対応できるよう、使えそうなフレーズを準備した。

迎えた 2 日目、Moderated Caucus やスピーチが続いた後に、Unmoderated Caucus が取られ、私は他のスポンサーと DR の内容を固めた。自分でも驚いたが、前日より確実に英語が聞き取れるようになっていた。さらに、他国の主張をまとめ、かつ自分の主張も明確にすることができ、とても充実した時間を過ごすことができた。また、DR のスポンサー、シグナトリーと DR 内容を確認し、団結を強めることができた。

その後の Moderated Caucus では、ホワイトボードを使った説明が功を奏し、拍手が起こって嬉しかった。さらに、午前中の後半にスピーチが回ってきて、パートナーがさらなる協力を呼びかけるために考えたパフォーマンスのおかげで、議場からさらなる拍手と歓声が起こった。伝えるということの意味を実感できた瞬間だった。

昼食後は DR が配られ、質疑応答の時間となった。私は DR の概要とその効果を説明し、DR をアピールすることができた。しかし、イラクが DR を中心的に書いていたこと、自分の英語力が足りなかったことから質問に答えることができなかった。このままでは終われないと思い、必死に他の DR を読み込み、質疑応答に参加できたのは、どんな状況でもあきらめずに落ち着いて処理する、ということができたのかなと思う。そしてそのまま投

## Global Classrooms

票行動に移り、私達の DR は結局否決されてしまった。原因としては、質疑応答の際、DR グループとして納得のいく説明をすることができなかったことにあると推測している。確かに否決されてしまったのは悔しかったが、自分の力を出し切ったという充足感と国籍を越えて議論を楽しめたという思いの方が遙かに強かった。

やはり英語の壁は高く、今後の課題でもある。しかし、現時点での自分の力を全て尽くして物事に対応する力が付いたことは、一番大きな実りだと思う。そしてそれは、物事を多角的に捉えることで自らの強みを最大限生かすことができるのだと思う。何より、課題を少しずつ克服して、他国の大使と会議を楽しむことができ、今までの努力が実を結んだと思った。また、国際社会の縮図である今大会では、他国大使の純粋に話を聞く姿勢、地道なロビー活動より公の場で交渉を進める姿勢が印象的であった。だからこそ、相手の主張を受け止めた上で、自分の主張を相手に届け、一つのゴールに共に向かうというプロセスが重要なのだと思う。

最後になりましたが、いつも支えて応援して下さいました方々、貴重なお話をして下さいました、国連日本政府代表部、国連平和維持活動局、国連クウェート国政府代表部の方々、グローバル・クラスルーム日本委員会、ユネスコ・アジア文化センター、引率教員の方々を始め、この事業に関わって下さった皆様に感謝致します。素晴らしい8期派遣生の皆と過ごした1週間は、本当に充実していてかけがえのない経験となりました。今回得たことを生かし、学びと成長につなげていきたいと思えます。本当にありがとうございました。



## 小坂 真琴

灘高等学校 2年

模擬国連国際大会@NY。中学の生物の授業中にその存在を初めて知り、2年前までは夢にも見ていなかった舞台。半年前にその切符をつかみ、この5月、自分はそこに身を置いていた。

日本に生まれ、日本に育ち、海外に行ったことさえなかった自分にとって、派遣事業は出発から帰るまで、全てが非常に刺激的なものだった。初めての、英語しか通じない場。当然頭では理解していたけれど、日本語が通じない人が山ほどいる、それも世界の98%くらいを占めていることを皮膚感覚で理解した。この1週間で文字通り世界が広がった。というより世界の広さを知った。

そして、国連やPKOで働いている方々のお話を初めて伺ったこと。印象に残ったのは、「国連職員だからと言って国籍は変わらない」ということ。国と国の交渉はもちろん、世界にまたがる組織である国連も、そこで働いている個人の努力と矜持の上に成り立っていることを改めて実感した。そして模擬国連をやっているながらほとんど知らなかった国連の実像に、少しだけ触れることができた。そろそろ模擬国連の話をしよう。時は半年前に遡る。

### 1. 全日本大会

学校で開いた練習会議を除けば、自分にとって初めての会議。議題は児童労働。Chinaは世界の工場として、児童労働を行っている企業が責任をもって解決する枠組みを提案。正当性と国益の観点から非常に良い政策だという自負はあったものの、段階が非常に多くてわかりにくいものだった。それでもModerated Caucus（着席討議）とUnmoderated Caucus（非着席討議）の両方を利用して、繰り返して説明するうちにその提案のよさをわかってもらい、DRグループ作成に成功する。結果的にModerated Caucusでの発言回数も増えて、優秀賞をいただいた。

### 2. 準備

議題が決まり次第、全日本大会のときと同じように準備を進めた。二人で案を考えてはお互いに潰しあい、よりいいものを見つけていく作業の繰り返し。そして再び、正当性はある、国益にかなってはいらぬが伝わりにくい政策（地域金融協力、民間セクターの協力）が完成する。しかし、4月のインフォメーションセッションで、圧倒的な英語力の欠如、そして伝わらないことには何も始まらないことをやっと身に染みて理解し、それからは軸をずらさずに簡潔に説明することに重点を置いた。

### 3. 会議

1日目。世界各国から来た大使たちと肩を並べる。意外と緊張はしなかったが、予想以上に相手の話を聞き取れないことに焦り始めていた。会議が始まるとすぐに、話題は投票権の均等配分か否かの二元論に収束し、独立した案を出し合う雰囲気ではなかった。ここで流れに巻き込まれ、話を聞いてまとめようとしたが、うまくいかなかった。さらに、二つのグループに股をかけていた状態で、ある程度地位を保っていたほうのグループを捨ててしまった。1日目の夜。機を逸したことを十分に承知していたので、スピーチを成功させることとクウェート大使として、自分たちの政策を通すことに全力を投じることを決めた。

2日目。最初に回ってくるスピーチに全精力を注ぎ、数あるスピーチの中で唯一拍手を得ることに成功する。その後は会議の流れも無視して、ひたすら非友好的修正案として自分たちの政策の協力者を集めることに奔走した。ここでは説明する側だった。半年近くにわたって準備してきただけあって、政策の内容には自信があり、きちんと伝えることができたと思う。そして修正案を提出することに成功し、一定の成果は残せたと思ったのだが、時間がないという理由で投票にかけられず、自分の政策を決議に残すことはできなかった。

最初から最後まで、英語の壁は高く立ちはだかり続けた。しかし、全日本大会では賞を意識し、DRの中心となってまとめることに固執していたが、国際大会はそれができな

## Global Classrooms

いと気付いた分、自分たちのボトムラインをはっきりさせ、明確な目標のもとに行動することができた。また、英語しか通じない相手との交渉を「楽しむ」という会議前からの目標を十分に達することができて非常にうれしかった。

模擬国連全体を通して学んだことは数知れないが、あえて1つとりあげるなら、伝えることの大切さ。いかにいいことを考えていても、相手に伝わらない限りそれは自分の考えに過ぎず、それ以上にはなりえない。しかし、自分の考えていることを十分に理解できる基礎知識が相手に無いかもしれない。あるいは十分に伝えるだけの言葉を操る能力が自分にもないかもしれない。それでも考えのエッセンスだけでも共有することができるのなら、それを伝えることで確実に何かが変わる。模擬国連のような大会に参加しながら、根本的に人前で話すのは苦手だったが、この2つの大会を通して、言わないことには何も始まらないことを痛感し、自信をもって話すよう心掛けてきた。この部分に関してはだいぶ成長できたと思う。

今回の派遣事業は、高校生活の中でもかけがえのない「楽しい」思い出であり、世界を知った最初の一歩であり、自分の将来を考えなおす絶好のチャンスであり、何より模擬国連に参加しなければできなかったであろう、11人の最高の友を作ることができた。

最後に、この派遣事業に参加するチャンスを作ってくださったすべての皆様—模擬国連を知るきっかけを与えてくださった宮田先生、様々なことを教えてくださった先輩方、全日本大会と一緒に戦ったDR4及び交渉したすべての大使、全米大会のサポートをしてくださった大学生の方々、スポンサーの方々、引率して下さった木村先生、8期派遣団のみんな、そして9か月間ともに戦い抜いた村田さん—に心から感謝申し上げます。



## 村田 幸優

灘高等学校 3年

「まずは全日(全日本大会)を必死に頑張ってください。国際大会は、チャンスです 笑」

二年半前、全日の見学に行った時に一期派遣生の方がおっしゃっていた言葉。

全日では体力精神ともに追い込まれ苦しい思いをした分、国際大会に向けては参加できることを大きなチャンスと捉え、肩の力を抜いて取り組むことができた。その結果派遣事業全体を通した六ヶ月を“大会の二日の為”と意識し過ぎず、それぞれの過程で楽しみながら、納得のいくまで力を注ぎ消化しきることができたのが何より良かったように思う。

**Support Paper** 作成のための、徹底的な担当国と議題のリサーチと政策立案。三ヶ月調べ考え抜いたことは、情報の収集力や再構成力がただけでなく、行き詰まりの多い国際問題を解決へと進める為はどうアプローチすればよいか、今まで模擬国連を通して学んだことの集大成となった。最終的には直接論文の著者である教授のもとを訪ねさせて頂き、現状考える最も国益と国際益に叶う政策の一つに自分たちが辿り着けていたこと、議題の理解を納得のいくまで深められたことは大きな自信になった。

**Information Session** のプレゼンテーション。政策を端的に、分かりやすく、印象的に人に伝えるパブリックスピーキング力と共に、内容やスライドが良くても練習しなければ台無しであることを、ここで学べたことが本番につながった。

一種の外交文書である **Position Paper** 作成。論理構造から単語の選び方、言葉の使い方まで何度も添削を受け書き直した分、今まで学校で経験した英作文とは全く違った英語での文章力が身に付いた。

そうした流れで、会議戦略がまとまった会議直前は、最後の“会議の二日”でしか得られないものは何か、どういう姿勢で臨むのか、といったことを直前まで大学生や小坂と話し合い、一つ自分の中で“協調”といったキーワードを持ち当日を迎えた。

会議の内容としては、想定内とはいえやは

り英語が障害となった。Moderated Caucus(着席討議会議)での討論や議事進行が十分に聞き取れず、会議の大きな流れについていくのは相当大変だった。そんな中、二日目の一番初めに行ったスピーチでは、前日に準備を重ねた甲斐もあり、二日間延べ百人以上の大使が発言している中で唯一の拍手が沸き起こった。あのときの満足感は忘れられない。その後多くの大使が声をかけてくれたことで、二日目を一日目以上に楽しんで過ごすこともできた。この会議は僕にとって海外の学生と真剣に議論する初めての場であったので、この贅沢な第一歩目からさらに経験を重ね、国際的な場で自分ができることを増やしていきたい。

もう一つ印象に残っているのが、朝一番で議長の元へ行き「スピーチ時間を二分に伸ばす motion を取るので了承してもらえないか」と交渉をした時の最後の議長からの返事。

「他の大使の反応と今日の議事進行を考えるとそれは難しい。だが君たちが昨日からずっと(状況に合わせて内容を作り変えながら)スピーチを用意しているのに、順番をギリギリのところまで回せなくて申し訳ないとも思っている。だからこうしよう。僕だけが二分であることを知っている。僕は二分後に木槌を鳴らす。君たちは自分のスピーチを堂々としてくれればいい。」その優しさも、忘れられないだろう。

二日間の会議を終えて感じたのは、模擬国連の“会議”は「人と何かをすることはどういうことか」が最も問われる場だということである。だからこそ誤解を恐れずに言うと、英語も事前準備も万全にした上での模擬国連会議の最後のピースは、今までの人生で培われたその人の **personality** にあるのだと思う。考えてみるとそれは当然で、会議の中では同じ **DR** (決議案) グループとして初めて会った同学年の人達と行動を共にし、時には何かをしてもらう必要が必ず出てくる。そこで大切なのはロジックでも皆を引っ張るリーダーシップでもなく、周りが「この人と一緒に何かをしたい」と思ってくれるかどうかであろう。そういった意味では、少なくとも国際大会においては賞を目指す賞から遠のくというのは真だと思う。

## Global Classrooms

ただここでは、会議を上手く運ぶ為の人間性について言及したいのではない。一つの見方として、“自分という人”そのものが試される大会など他にはあまりなく、そこは模擬国連特有の怖くもあり面白くもあるところだと思ったと同時に、逆に模擬国連という機会を通じてありのままの自分を痛いほどに感じる事が、自分を見つめ直すきっかけとなり、成長へとつながることもあるのではないかと感じた。僕の場合その結果最後に辿り着いたのは、「どんな **personality** でも、その人が意識をすれば、例え長い時間がかかったとしても変えることは可能なのだ」という確信だった。それはこの半年で得たものと同じ若しくはそれ以上の、今回の派遣事業を通しての一番大きな気づきであり自分の中での変化であった。

派遣事業の半年が、最後の三日で一気に収束していくように感じられた。

これらの経験を通し、これから何かを行う上での大切な力を集中的に培えたと同時に、自分を少し変えることができた。そして何より、本当にこの半年は楽しかった。でもそれらは全て、周りの存在、特にグローバル・クラスルームを通じたつながりによるところが限りなく大きい。理事会の大学生の方や5,6,7期の先輩からは、模擬国連のことだけに留まらずたくさんのことを教えて頂いた。最後の気づきも八期派遣団メンバーと同じ時間を過ごす中で得られたものである。例えば、もし僕がグローバル・クラスルームではなく個人でこの国際大会にお金を払って出場していたとしても、得られたものは今回の数%にも満たなかったであろう。上の世代から頂いたものに対する感謝の気持ちを忘れずに、受け取ったもの以上のことを下の世代に返していきながら、このつながりを大切にしていきたいと思う。

実は今回、たくさんの **OBOG** のどの方からも、必ず「楽しんで！」というアドバイスを頂いていた。これからの派遣生に向けて伝えることがあるとすれば、その言葉の意味するところを考えながら今から準備を進めることで、より充実した派遣プログラムを送ることができるのではないかと考えている。抽象的なことが多くなってしまったので、もう

少し具体的な準備の過程や大会の様子も知りたいということであれば、これから気軽に聞いてもらえれば全て答えるつもりでいるし、他のことも含めて全力でサポートしていきたいと思っている。

最後になりましたが、このような貴重な経験をさせて頂くにあたり、グローバル・クラスルーム日本委員会や ACCU の方々、八期派遣団の皆やパートナーの小坂、そしてここまで三年間お世話になった全ての人に感謝しております。本当にありがとうございます。



## 支援協力団体一覧

本大会の実施にあたり多くの方々から温かいご支援を賜りました。  
ここに厚くお礼申し上げますとともに、謹んでご芳名を掲載させていただきます(敬称略)。

### 【共催】

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

### 【後援】

外務省 経済産業省 文部科学省 公益財団法人日本国際連合協会 国際連合広報センター

### 【協賛】

株式会社公文教育研究会 TOEFL Junior (GC&T) 三菱商事株式会社  
株式会社JTB トヨタ自動車株式会社 一般財団法人凸版印刷三幸会 株式会社ニチレイ  
株式会社講談社 三井物産株式会社 株式会社ナガセ東進ハイスクール みずほ銀行  
学校法人駿河台学園駿台予備学校 学校法人河合塾 三菱東京UFJ銀行 三井住友銀行  
株式会社エヌエフ回路設計ブロック キッコーマン株式会社 伊藤忠商事  
学校法人高宮学園代々木ゼミナール 丸紅株式会社 日本光電工業株式会社  
損保ジャパンちきゅうくらぶ 株式会社日能研  
海外トップ大進学塾 Route H (ベネッセコーポレーション)

### 【協力】

日本航空株式会社 読売新聞 日本経済新聞社 株式会社リクルート 理想科学工業株式会社  
(順不同)

### 【Special Thanks】

国連クウェート国政府代表部 (Permanent Mission of State of Kuwait to the United Nations)





公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、グローバル・クラスルーム日本委員会とともに高校模擬国連事業を共催し、日本代表団派遣支援事業を推進しております。「次世代の国際人/グローバルな人材を育成する」という趣旨にご理解・ご賛同をいただき、ご協賛・ご協力をいただいた企業様・団体様に改めて深く御礼申し上げます。

昨年11月に開催された第7回全日本高校模擬国連大会で第15回グローバル・クラスルーム高校模擬国連国際大会日本代表に選出された皆さんの国際大会における堂々とした英語での主張、交渉能力は日本代表として立派なものでした。皆さんの熱意も素晴らしく、また、中東のクウェート国担当ということでのリサーチや準備も大変だったということは想像に難くありませんが、その中であって最優秀賞（Best Delegation）、優秀賞（Honorable Mention）、ベスト・ポジションペーパー賞に輝いたことは私どもの大きな喜びでもあります。ニューヨークで出会った多くの方々、JCGC関係者、今まで全日本大会に出場された皆さん、国際大会に出場したOB/OGの皆様からも沢山のお祝いの言葉をいただいております。

日本代表は例年圧倒的な事前研究による豊富な知識に裏付けされて担当国の国益と国際益のバランスを取りながら提案文を作成し、会議でも自国の立場を主張してきました。今年度も何か月にも渡り準備し、現地宿泊ホテルでも会議の準備を夜遅くまで、また朝早くからしていたと思います。皆さんが国

際大会から得たものは是非後輩にお伝えしてください。

今回の国際大会で得た経験や努力が、皆さんの将来のキャリア創造に役立ち、次世代の国際人/グローバルな人材に成るための一助になるなら、ACCUとしてもこれ以上の喜びはありません。

最後になりますが、国際大会派遣にご尽力いただいた関係各位の皆様には心より御礼申し上げます。今後もますます派遣事業が発展していきますよう、ACCUとしても精一杯努めてまいります。今後ともご支援・ご協力何卒宜しくお願いいたします。

#### ユネスコ・アジア文化センター(ACCU: Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO)について

ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)は、ユネスコ(UNESCO、国際連合教育科学文化機関)から「アジア太平洋地域での文化の相互交流を促進する中核的センター」の設置を打診されたことを契機に、1971年に日本政府と出版界を中心とした民間の協力によって設立されました。設立以来、ユネスコのうたう「平和は、人類の英知と精神的な連帯のうえに築かれるものである」という精神のもとに、日本を拠点にアジア太平洋地区諸国の教育と文化の分野でユネスコや各国関係団体と協力して、人材の育成と相互交流を促進する事業を行なっています。

2011年11月からは「公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター」として、これまで以上に関係機関と連携して地域の現状と社会の要望に即した事業を展開しています。



## グローバル・クラスルーム日本委員会(2014年6月現在)

(敬称略、順不同)

### 【アドバイザー・ボード】

明石 康

(元国連事務次長／公益財団法人国際文化会館理事長)

### 【評議会】

星野 俊也(議長)

(日本模擬国連創設者・OB／大阪大学 副学  
長／元国連日本政府代表部公使参事官)

笹原 怜奈

(2011年国際大会派遣生／早稲田大学 政治  
経済学部 3年)

中満 泉

(日本模擬国連 OG／国際連合平和維持活動  
局 中東・アジア部長)

光本 愛理

(2012年国際大会派遣生／慶應義塾大学 法  
学部 2年)

竹林 和彦

(渋谷教育学園渋谷中学高等学校 教諭)

紀谷 昌彦

(日本模擬国連 OB／在ベルギー日本国大使  
館公使)

柿岡 俊一

(埼玉県立浦和西高等学校 教諭)

米山 宏

(公文国際学園中等部・高等部 教諭)

立花 裕太郎

(グローバル・クラスルーム日本委員会 理  
事長／慶應義塾大学 法学部 3年)

松野 雅人

(グローバル・クラスルーム日本委員会 研究  
／東京大学 教養学部 3年)

## Global Classrooms

## 【理事会】

立花 裕太郎 (理事長)  
(慶應義塾大学 法学部 3年)

青柳 沙耶  
(東京外国語大学 言語文化部 2年)

松野 雅人 (研究担当)  
(東京大学 教養学部 3年)

大内 朋哉  
(東京大学 教養学部 2年)

逢坂 瞳  
(聖心女子大学 歴史社会学科国際交流専攻 3年)

青柳 拓真  
(東京大学 教養学部 4年 / 2013年度研究担当)

柴原 一貴  
(慶應義塾大学 法学部政治学科 4年 / 2013年度理事長)

古畑 拓真  
(明治大学 法学部 4年 / 2013年度副理事長)

## おわりに

国連とは国際社会の縮図です。それは、世界 193 の加盟国による最も普遍的な議論の場であり、その議論は人類全体の行く末を左右しかねないものなのです。国連での会議外交では、各国の国益が激しく対立する場面が多々ありますが、外交とは単なる国益のぶつかり合いではありません。各国は自らの国益を見極めながらも、同時に国際社会全体の共通利益を探り、一国では解決不能の諸問題に共同で対処していく、複雑でかつ創造的・建設的なプロセスが繰り返されなければなりません。こうしたプロセスで必要な物は、相手を言い負かすためのロジックではなく、議題となる問題への深い知識や洞察、高度の判断力・交渉力そしてコミュニケーション能力などです。模擬国連は、知識とスキルをもとに、立場や考えを異にする人々の間で、積極的な国際協力を実現するための合意形成を進めるエクササイズとして、とても有益なものです。

今回日本から参加した若い「大使」たちは、ニューヨークにおいて本物の国連を間近に実感しながら、教科書では学ぶことのできない多くのことを体験し、これからの学びと研鑽の糧を得て帰国しました。

私たちの暮らす世界は、恐ろしいほどのスピードで変革しています。既存の考え方にとらわれず、創造的に、ダイナミックに課題に取り組み、世界の人々と協力し、またリーダーシップを発揮できる人材を日本からも数多く出す必要があります。私たちは、ニューヨークでの模擬国連会議に高校生を派遣する事業を、そのための小さな、しかし重要な活動のひとつと位置づけています。参加高校生が持ち帰る経験は、国連という限られた場のみならず、広く外交、ビジネス、研究などの場で有益なものであると確信しています。

米国国連協会からのご厚意と数多くの支援協力団体のご支援により、少数の有志によるグローバル・クラスルーム日本委員会が始めた高校生の日本代表団派遣支援事業は今回で 8 回目となりました。今回も代表団にご参加くださった各校のトップを含む教職員各位、保護者の皆様、そして生徒さんたちご自身がそれぞれ責任ある姿勢と冷静なご判断を胸に行動し、何ら問題なく派遣事業を終えられ、さらに優秀な業績を残してこられたことを私たち評議員は、心からの感謝と感激の思いで受け止めました。ありがとうございました。

また、毎回の派遣事業には大学生の全国組織である日本模擬国連による運営が不可欠ですが、立花理事長以下、代表団のためとなるよう誠実かつ効果的に準備に取り組んでくださったことに改めて厚く御礼を申し上げます。さらに、本事業への支援をお続けくださっている協賛/後援諸団体には感謝の言葉もございません。私たちとしては、多くの皆様のご支援とご期待を励みとし、グローバル・クラスルーム事業の更なる発展に一層の努力をしていく所存です。どうぞ今後ともご指導・ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

グローバル・クラスルーム日本委員会  
評議会 議長 星野 俊也



編集・発行      Japan Committee for Global Classrooms  
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

発行年月日：平成 26 年 8 月 21 日